江戸名所圖會

十八

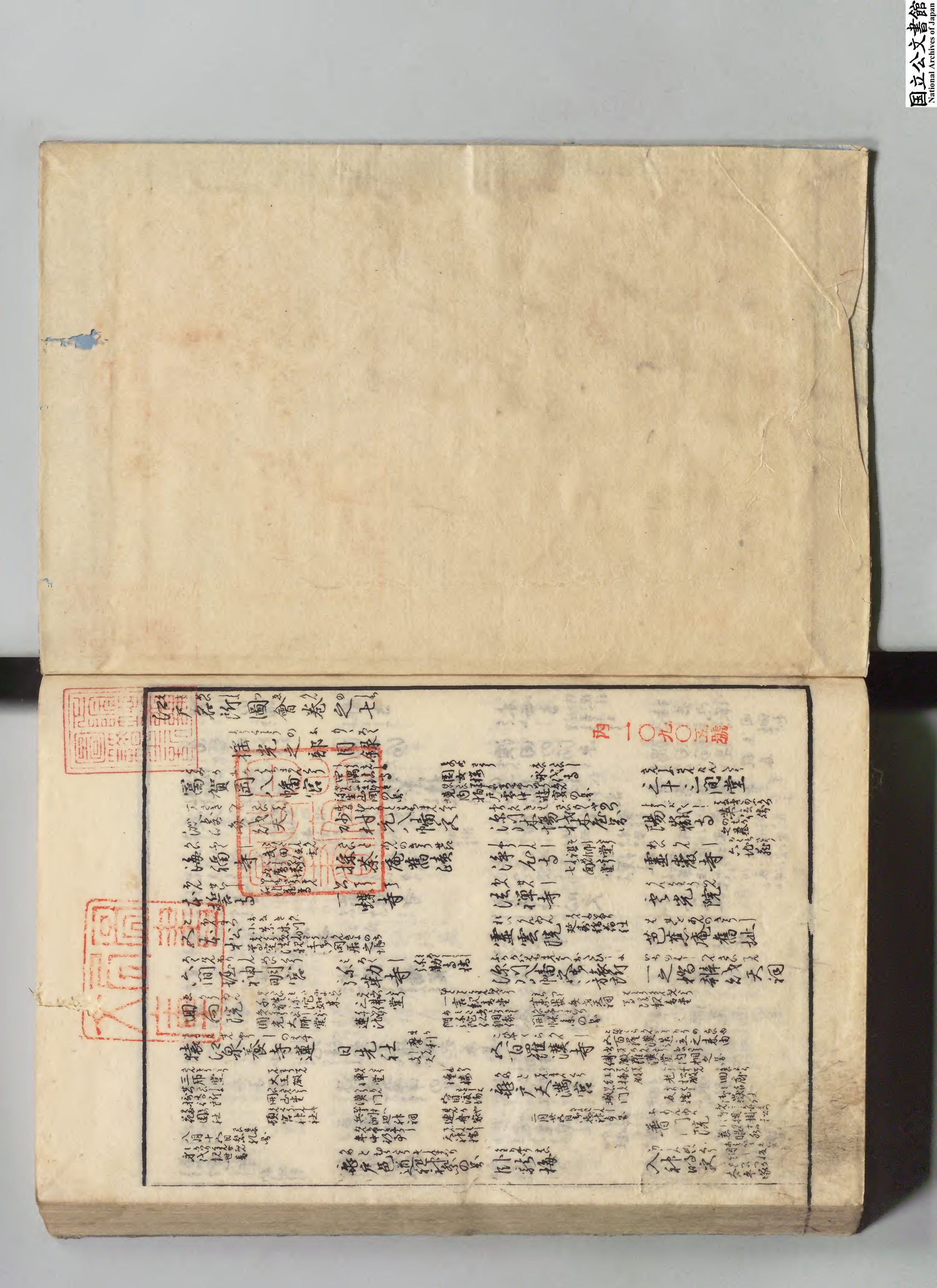
和書門
類 二二七一八
號
函 一四一
架 一四
冊 二〇

内閣文庫
和書
類 二二七一八
號
冊 二〇
函 一六七
架 一五

内閣文庫
番號 和 22718
冊數 20 (18)
函號 267 81

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行徳塩濱
同塩竈圖
甲宮
圓光大師遺跡

長嶋湊
新利根川
迦羅嶋起瀬
市川渡し

市河城址
根本橋
総寧寺
鐘ヶ淵

国府臺
羅漢井
石棺
金光明寺
同古戦場
同僧山

国府城址
持宝坂
真間弘法寺
楓古樹
手児名明神社
遍覧亭

鏡石
真間濱
真間入江
真間於須比

真間浦
真間の井
梨園

真間継橋
真間手兒名旧跡
曽谷妙見堂
高石明神社

葛飾八幡宮
八幡不知森
祖師堂
絵馬
宝庫
開山墓
刹堂
鬼子母神堂

安房須明神社
正中山法華経寺
宗門最初法輪旧地
奥の院
支院
若宮八幡宮
万燈

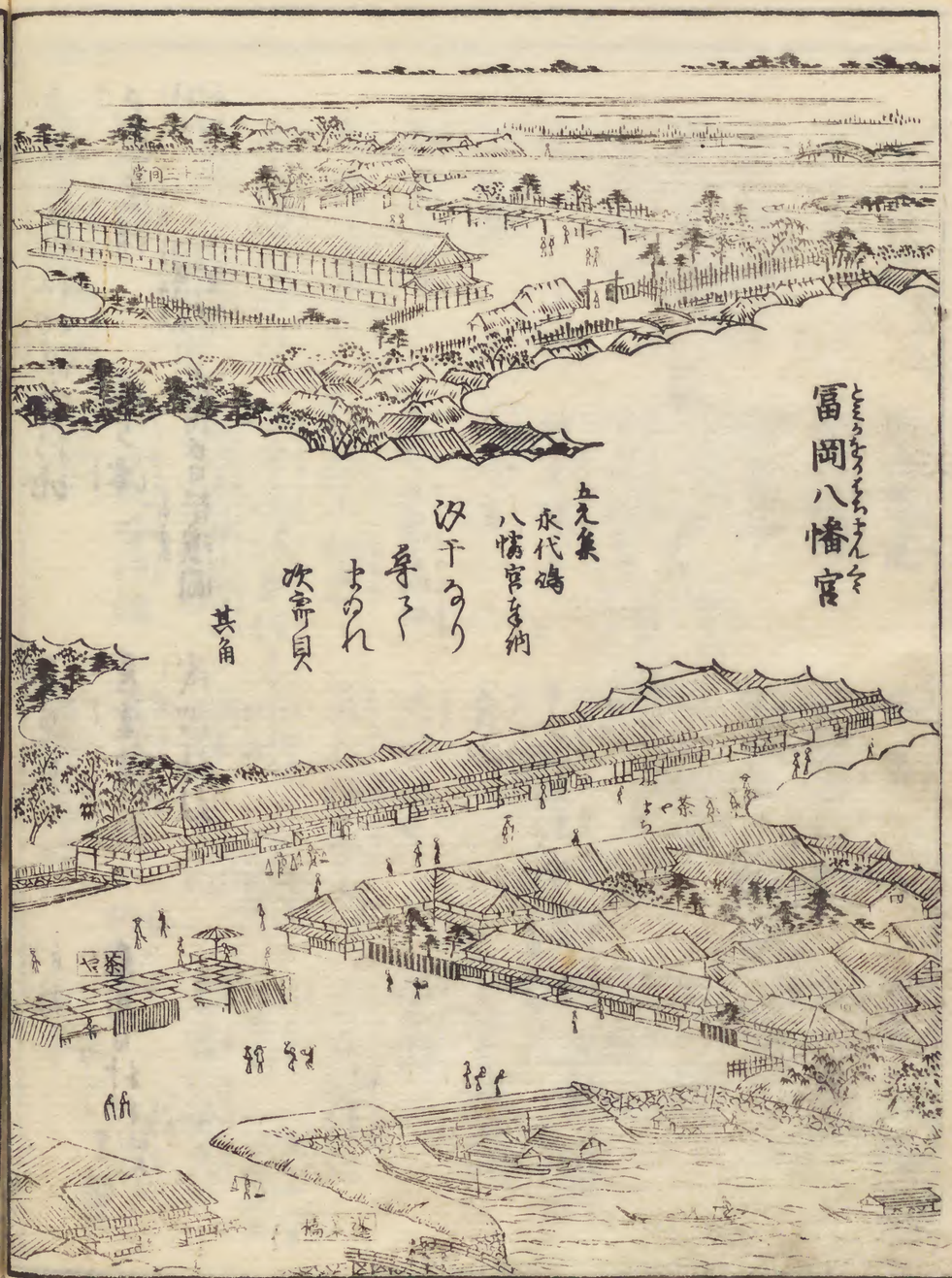
二王門
番神社
中興日常上人墓
葛飾明神社
葛の井
宝殿

妙正池
妙正大明神祠
阿須波明神社

勝間田池
熊野宮
洗川
石芋

意富日神社初繩摩訶地
天道念佛
神宝
遠ヶ澪
九月廿日祭禮圖
夏見劇
慈雲寺
茂浩神社
船橋
意富日神社

社内拘ヶ多紀の中ゝも
二彩柔毫とゝ小ものゝ
ゝゝ名ゝる〳〵
大化都
久本楼
茶や
そうじ
本宮
番所
門
の鳥居


富岡八幡宮
五元集
永代鳴
八幡宮を納
汐干ゝり
寄ゝ
ゝの
吹奇貝
其角
茶や
橋本

茶や
社本
不動尊
不動尊
動不
裏門
天堂

其二
天天
岡富
観音
茶や
茶や
茶や
天文堂

其二

五月雨の
とゝろゝの
まゝも
いろとくて
雲さすろ御代へ
ゆるき代の
ちゝ

仁和寺宮

富岡八幡宮　深川永代嶋にあり　別當は真言宗にして大栄山金剛
神院永代寺と號す　江戸名所記に寛永五年の夏弘法大師の靈示あるにより高野山の両門主碩學其外東國一流の衲僧此永代嶋に集會し一夏九旬の間法燈を列し弘法大師の御影堂を建て真言三密の秘蹟を講せられしより以後神前に護摩のあるゆへなりと云云

内一〇九〇五號

本社　祭神　應神天皇　神影八幡宮右　天照大神宮　左　八幡大明神　三座
相傳往古源三位頼政當社八幡宮の神像を尊信し其後千葉家
及び足利將軍尊氏公鎌倉の公方基氏又宮領上杉等の家々より代々
太田道灌崇敬殊に厚かりしより道灌没するの後は神像の所在も定
かならざりしに小寛永年間長盛法印靈示によりて感得せ　今尚社より十二町ばかり
東の方砂村の海濱に元八幡宮と称とする宮居あり尚社の旧地といふ　依此地に當社を創建せしとのことも
華構の餝はなかりしを唯茅茨の營をなすのみ我が大和國生駒山
の開基寶山師正保三年丙戌永代寺周光阿闍梨の法弟となり寛文
四年の頃靈夢を感じ宮社を經營せんと日あらずして落成し結搆
備はりたりあらずして以降神光日々に新なり河東第一の宮居と
なるに當社の額に八幡宮と書したる青蓮院宮尊證法親王の
真蹟なるに社内末社多く依悉く是を畧す
當社四隅鎮守　艮隅　蛭子宮　宮川町の巽隅　荒神宮　入船町の道の傍にあり
坤隅　摩利支天宮　永代寺門前仲町の南にあり　乾隅　大勝金剛宮　日呼巷口町にあり
園女桜　永代寺林泉のうちにあり　宝徳年間園女といひて俳諧を好める婦女これを植たりと
二華表　惣門の前にあり石をもつて製し左右の柱に銘文を刻し此文は嶋氏撰ずるものにして書
赤井保水の筆なり　左の柱に

富賀岡八幡神祠石華表銘　並序
維著雍敦牂之歲部下人某某等拾渠名戴力率錢
建冨岡八幡祠前石華表凡厥高壹丈伍尺左右中
間稱焉石以代木備不朽也厥石取諸相之北肥山
焉蓋此舉也欽祈國家旁及自禱云爾具狀來諏
鳳卿以文之鳳卿聞之采慈采蘋可薦於亀神忠信
由中也而況於不朽周之所歸風之所自於是乎觀
人載上之心矣神之歆可知也因叙厥載勒右柱
銘以繫左柱亦其所需也

繫昔應神　帝悳惕天　蔑跡于豊　男山之遷
威霑顯赫　奕世且千　邈矣東海　齋祠壹公
惟石之柱　磐之祠前　懇祈皷壑　私禱相延
敦忠祗肅　神監昭然　幽宮隙隱　福聲永年

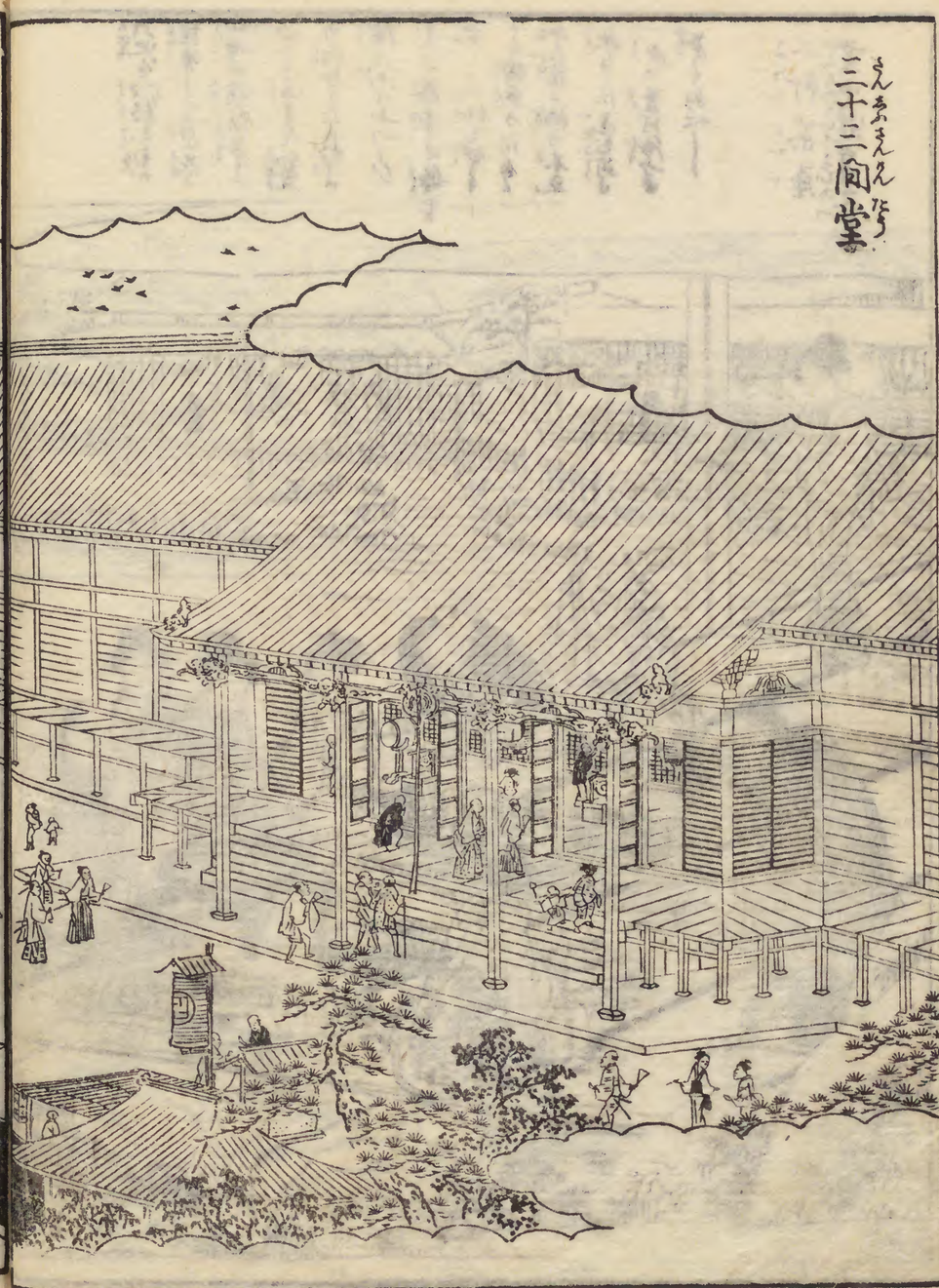
山岡　毎年三月廿一日弘法大師の御影供を修行と此日より同廿八日まで社列尚永代寺の林泉を開き人々見物をゆるす行幸同日
祭禮　開年八月十五日より執行と此日神輿三基本所一の橋の南藏舟浦の前より行列へ神幸同日
歸輿　ことの祭紀い寛永二十年癸未八月十五日初て執行あり駕連綿江戸名所
記　慶安四年の秋天下泰平の御禱のため相州鎌倉鶴岡八幡宮の法式を模し
尚社より流鏑馬をもよほす左右より假屋桟敷をもうけ是を見物と貴賤市をなすなり是同書より
後乎より後草の三十三間堂をもとより遷さまとしるも甚流鏑馬の餘風なるべ
るらん歟

當社門前一華表より内三四町より向ハ両側茶肆酒肉店軒を並へて常小
絃哥の声絶ることなし社頭より二軒茶屋と称する貨食屋抔あり
遊客絶ることなし牡蠣蜆花蛤鰻鱺魚の類ひを此地の名産とせり
三十三間堂　同所二町ばかり東の方よりあり相傳寛永年間　或人云十九年　大江戸
の弓師備後といふる者射術誉古の落京師蓮華王院を模し三十三
間堂を創立せん事を乞依後草よりおいて此を揚ひ諸家より勧進し
て建立の功を募るとか於て同十九年壬午十月普請落成と

其二

の四方と今矢嶋と字とるは二十三間堂の旧地なるべし
今は所在とるれを俗間堂前と唱へるも二十三間堂の前と云へ略説
図緑の芝に雁く灰燼せしかは其後今の地に移されたりとなつ
江戸二十三間堂矢数順は慈眼大師の發起なりしとあり又一説よむ〳〵
流の武上これを建あり〳〵江戸剣術の達人柳生と岩ちよかを弓ちしかるりとつり
例を崎辯財天社　同所東の方例崎よあり列當を吉祥院と号す本尊
辯財天女の像は弘法大師の作とかは相傳元禄年間深津氏正隆
台命を奉〳〵八幡宮ゑを東の方の海濱を築立て陸地とし依同
十三年庚辰護持院の大僧正隆光河辺氏此地に天女の宮居を建立と
なり
此地は海岸ゆゑ佳景なり殊更弥生の潮盡よは都下の貴賤袖を連
ね真砂の文蛤を拾ひ又は楼船を浮へて妓婦の絃歌よ興を催
さもあり〳〵春色を添るの一奇観なり又冬月千鳥よも名を得
長光山陽嶽寺　深川富岡橋の北結横小路よあり妙心寺派の禅宗よ
〳〵本尊観音大士の像は恵心僧都の作なりと云向井氏忠勝

二軒茶屋
雪中遊宴之図



国立公文書館
National Archives of Japan

河内国
弊財天社

砂村
富岡元八幡宮
洲崎 矢天
十八丁あまり東
の海濱くよあり
深川八幡宮の
四北なり

格葉の
菜の
ゆ
ゝ
ゆ
わ
し
宗瑞

深川
木場

墓の精舎なり文室和尚を冠山と陽嶽に向ひ和尚に相列三崎見
桃寺白室和尚の法号なり（見桃寺も領主向井氏の法号なり）
出山釋迦如来像（立像二尺なり拙作なり坪内大隅四郎と云る人為寺文室和尚の需に為て作なり彫刻記に曰く外道輪信士元文二年丁巳閏十月十日と記してあり通称い長八郎と信勝といふ）
二代目英一蝶墳墓（当寺卵塔の中にあり禅面に桜外道輪信士と記してあり通称い長八郎と信勝といふ）
永壽山海福寺　同所寺町通り中程の右側にあり黄檗派の禅林なり
江戸觸頭二箇寺の一員たり萬治元年戊戌の創建開山隱元禅師
中興之獨本和尚なり本尊釋迦如来左右に迦葉阿難十六阿羅漢木
の像を安置開山隱元禅師の肖像もあり

佛殿　額に二重　大悲殿　掲る額筆者かれし

聯は一系の杉に掲る尚る七世孫別和尚の筆

聯　左右の掲る大鵬の筆

海國衣民風高石濤呼

聯　掲る冠山隱元禅師の筆

聯　掲る額筆

金剛毛六物是弥陀如来代

聯　掲る額筆

禅刹中興法雲振乾坤千秋

聯　掲る額筆

妙和端義美文玉毫光現瑞

聯　掲る額筆

益門弘至千秋稱海雲東秋

聯　掲る額筆

降魔捕正法遂又以安字

聯　掲る額筆

天王殿　内に閻魔帝の像と安と額に二隱の斬よりなる

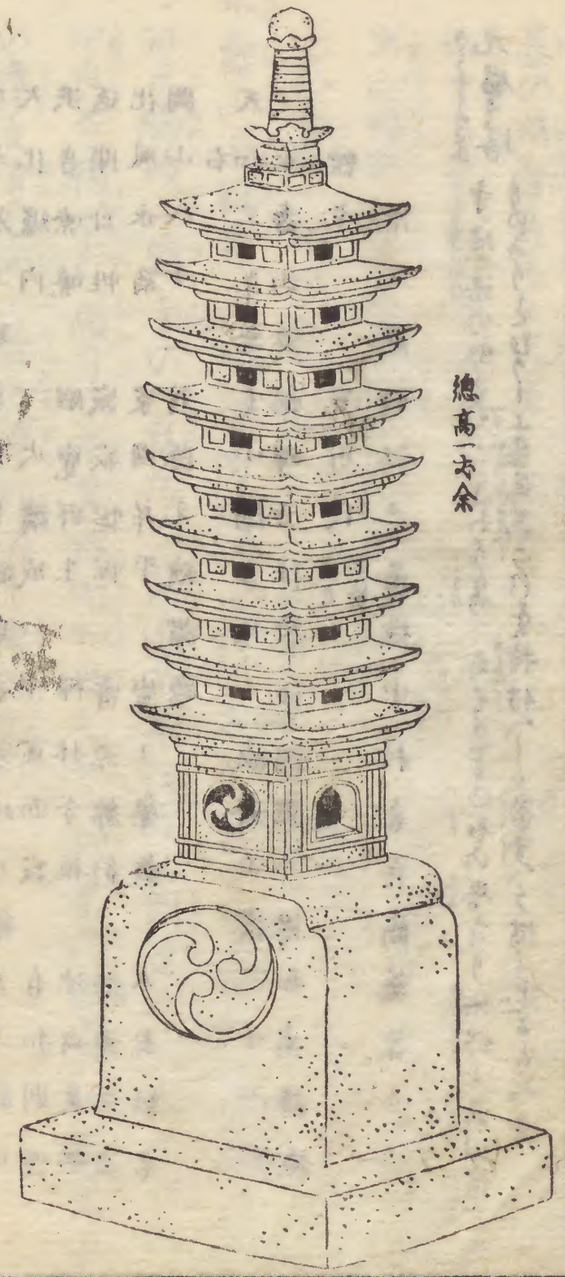
鐘樓　天王殿の右よりあり大鵬和尚の筆なり

鐘樓　鯨の彫文に陸元禅師撰なる銘其文左のごとし

崑山洪鐘者寛文壬子年石川政勝本住居士捐之
爲大福田因請銘乎　開山隱老和尚永令垂不朽
也時天和二年壬戌之冬刻火俄起炎燎殿宇巨器
等並者同氏思失先亡之本願忻然鳩金重新造焉
及乎竣工知事來乞銘遂再舉此以鐫其上銘曰
大化爐内一火鑄成　中虛而寂　有扣則鳴
洪音嘹喨　醒覺群生　禅林令振　地府葉輕
返聞自性　寂寂惺惺　寓源綿衍　福海澄清
化風永扇　家國昇平　覺王聲教　大矣難名
開山八十一翁隱元稽謹題

天和三年癸亥小陽吉日
永壽山海福禅寺住持沙門獨本源和南謹識
檀主　石川氏（正之　正茂）
治工武州江戸居住中村喜兵衛藤原正次

九層塔　寺境北の方にあり高一丈余の石の塔なり相伝ふ武田信玄の
ものなりと云ふ土屋氏某これを持伝へしの為寺に建るとなり



總高一丈余

採茶庵舊蹟　同所平野町より俳諧師枳風子の庵室なり枳風本國い
勢州にて枳山氏なり鯉屋と唱へ大江戸の小田原町に住て奥售たり
後隱栖して一元と号し裏翁裏林の号あり常に俳諧を好み檀林風を慕ひ
のち芭蕉翁に師とし此延に遊ぶ寛元六十年翁常に奥せられ
て云く去未い西三十三箇國枳風い東三十三箇國の俳諧奉行なり

と　次の芭蕉翁の句碑に詳なり享保十七年壬子六月十三日八十六歳にて没せり西本願寺の中興僧なり

塔ヒ

枳風句集　手向展採茶庵をとれかれ笠の雨

秋萩をうつしうえそ初桜の雪ちりうつるやどへ

白雪もとけぬ萩乃うれ

ちのめられよひらまて

萩うえてひとりうえうらめ捨て郎　枳風

時雨

深川い月も時雨ふ長うの紙こ乃雨

深川よりうれて

川の音蛙の起臥とし

法苑山浄心寺　同し通り西覺寺橋より北の方右側にあり日蓮宗中興開山

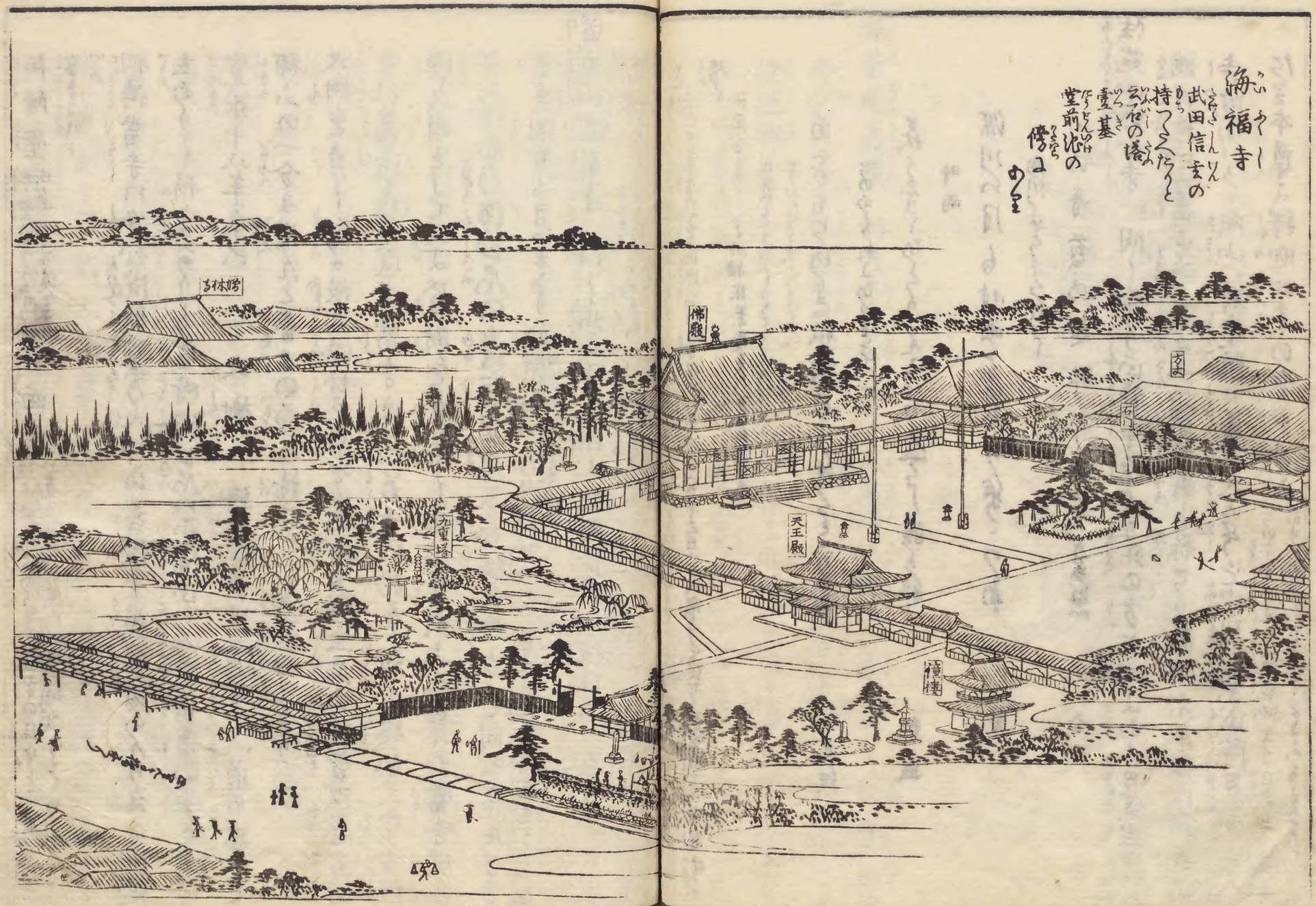
國月延山に属せり乃身延山の弘通所と称せり萬治元年戊戌創建の

寺院なり兩山い通遠院日義上人と号し中興い覺成院日念上人

たゝ本尊に釋迦如来の像を安置　當寺にはこれまなるこ

全

全


海福寺
武田信玄の
持つてゝたゝと
こつぱの塔
壹基
堂前池の
傍ら
佛殿
天王殿
僧堂
九重塔
防林

祖師堂（本堂の左にあり）　七面堂（日蓮上人の像を安置　延山興の院の七面と同作なり）

當寺は江戸

相傳當寺は淨心院殿妙秀大姉の菩提を吊いせんが為に御建立あり〻〻精舍なりと當時淨心尼は小堀正一入道宗甫の妾なり

大樹

御誕生あり頃正一入道の忠心を

寛永十八年辛巳

御乳母となり

補ふの一分に備へんと春日の局に願ひ出

大樹を育〻なる故に淨心尼卒するの後も猶生前の勤労を思召出

されば萬治元年戊戌當寺境内若干の地を封〻賜ひ又堂舍經

營の料として大に貨財を喜捨〻ひ日義上人をして當寺開山

たらしむ乃淨心尼の遺廟を建又香燭の料として同之年庚子寺

產を附せらるるなり

（寺の境内に阿彌陀佛を安置す　日宗大姉の墓あり）

道本山靈巖寺　は〻北に隣る淨土宗関東十八檀林の一室にして宏壮の

梵刹なること本尊は阿弥陀如来開山は靈巖和尚なり

傳に姓は里見氏南總小糸の產なり十三歳にして縣青龍寺の秀岩阿闍梨の室に入剃髮し其性明敏にして寛永に檀林の英〻たり寛永十八年九月一日北寂に報壽八十三云又淨土傳燈系譜に南總天羽郡佐貫の人或云後別府中の老姓にして氏泥津淨運院尼の法嗣なりと私尚開創の精舍牧笛寺あり牧笛寺は寺產を附せらる寮舍僧房數を連ねて巍然たり正元坊を造立

せり銅像の地蔵菩薩大江戸六地蔵の一員なり〻〻總門の内正面に

對し毎年四月朔日より同十日まで阿弥陀經千部讀誦修行あり

相傳寛永年間當寺開山靈巖和尚或日大江戸の東渚を顧て侍

者に謂て云く我大盥を此地に建む侍者の云く江潮浪高く鉢

盂底空し〻爭巨盥碩梁を架せん師笑て云く俟夫日あらん於是師

化疏を筆〻諸檀家を勸勵し一貫毎に十念して脈譜に結緣する

こと凡小四輩競靡廣汀日あらずして陸地となる（今靈巖嶋と稱す）其地早く

成て梵刹を開創し靈巖寺と号せしに於て学資五十石を附し

爾法幢盛に起て五百の義龍恒に蟠る者に河山和尚の世（尚寺第二世松蓮社大誉）

頑魯と号せ泉州堺の人こ　明暦丁酉の回録に曜に悉灰燼とするの後今の地に移さることゆり其頃い今の地も海濱にして輒寺院構営もるのりかさ
ゆりし成阿碩和尚　阿山和尚の才ある奥澤九品佛の冠基こ　十方に勧進して地を築固め諸
堂成建立せらるとゆり

當知山本誓寺　重願院と号せ同通りの向例にあり浄土宗江戸四
箇寺の一員たり　京都知恩院に属せり　此寺三行もるといつる所に如来を本尊とせ
桐傳此本尊い相州小田原の漁者　其者を辯ゆ魚網を洗して彼地の海中
小得て後霊示に仍せ當寺に安置すゆ往古い小田原
にありて傳蓮社曜誉酉冏和尚　酉冏師い此徳飯沼弘經寺の第二世こ　創建して藤枝氏開基の
浄舎にありしに文禄四年丁未　厳命に依寺を大江戸に移せ　其
地い今の市郭内　貞蓮社大誉上人文賀和尚中興の開祖とする　傳燈系譜に念誉と
昆各市門の辺にあり
のり俗姓い田中氏相州小田原の人なりこ世祖の
頑学にして門りに名僧おわしとゆり　其後馬喰町の辺に地を賜ひ一宇
水戸中納言頼房卿の御母堂英勝院殿當寺を彼造ゆり　當寺もりて
馬喰

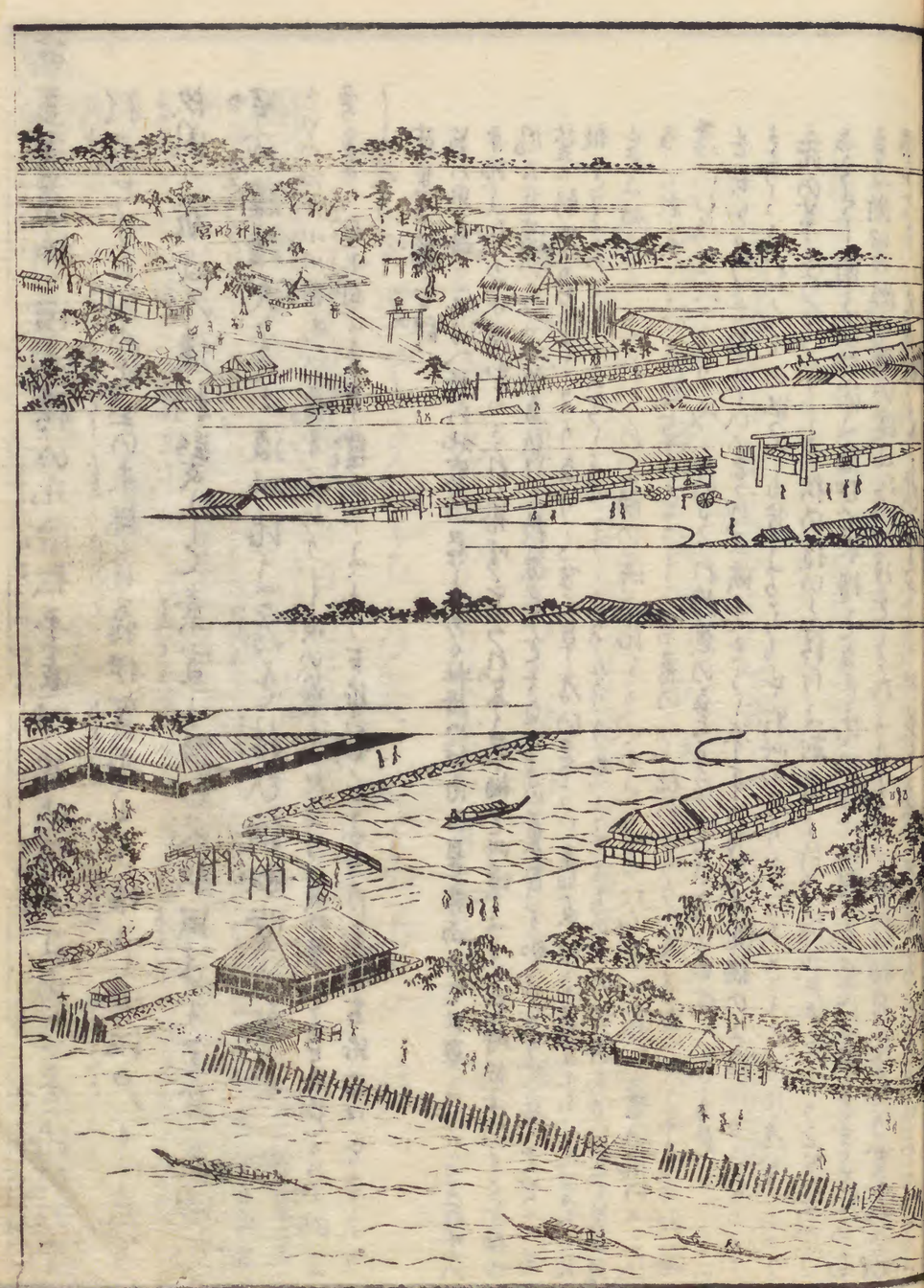
地蔵尊石像　尚寺境内に安置せ始い卵塔の中にありて人の印の石にあり一寸の享保のはじめ
霊験ありとて今一宇の香堂を建てられを安置せ群集せりとゆり今一宇の香堂を建てられを安置せ

一蝶寺　冏呼東の方海辺新田殿の内にあり京師妙心寺派の禅
宗蓍龍山宜雲寺と号せ元禄七年甲戌創建の梵園にして草禅
和尚開山たり英一蝶翁曾當寺に寓居せ其頃の遊とて佛殿僧房
等の屏障悉く翁の畫にあり故に世俗一蝶寺と字せ　一蝶の住い第二巻に
冏呼山法禅寺　冏呼南の小路にあり浄土宗にして京師知恩院に属せ
本尊に阿弥陀如来の像い佛工安阿弥の作にあり　海中に沈の霊像と称せ　左右二十五
菩薩の像い雲中に羅列して常に行者を護念して場い和の鮮麗
を摸擬せ　奥院と称せるもの極楽上品上生の鮮相にして　冏山い長蓮社英誉
阿上人と号せ　荘厳せるる美を尽せり故に世俗極楽寺と字せ　慶長七年九月廿二日に化寂せ　濃列恵那郡粕塚の住人俗姓い伊賀氏
小二郎五郎則俊と号せ　伊賀左衛門佐則吉の二男にして後伊賀と改む　弘治元年乙卯粕塚

頑魯と雖も泉州堺のくに　明暦丁酉の間録に曜り惟る悉灰燼となるの後今の地に移
さるゝとゆへ其頃は今の地も海濱にて輒寺院構営もなりがたく
なりし故阿頼和尚（阿山和尚の弟子なり奥澤九品佛の冥基と）十方に勧進して地を築固め諸
堂殿建立せらるゝとなり
當知山本誓寺　重頃完と号と同通りの向例にあり浄土宗江戸四
箇寺の一員たり　倍佛の阿弥陀如来を本尊とす
桐傳此本尊は相州小田原の漁者網を洗ひて彼地の海中
に得て後霊示に依て當寺に安置すと伝へ当寺往古は小田原に
ありて傳蓮社曜誉西岡和尚（西岡師は北総飯沼弘経寺の第二世）創建し藤枝氏開基の
浄舎なりしに文禄四年丁未　嚴命に依寺を大江戸に移す
（地は今の市郭内昆布市門の辺なり俗姓は田中氏相州小田原の人なり）貞蓮社大譽上人文賀和尚中興の開祖とす
（傳燈系譜に念誉と）
頑学にして門徒多く僧侶なり　甘其後馬喰町の辺に地を賜ひ
水戸中納言頼房卿の御母堂英勝院殿當寺を御造営ありて
東叡寺を以て朝鮮の三使来聘の宿館たり天和二年四月の後今の地に移る
地蔵尊石像　尚寺境内に安置せし卵塔の中にあり人の印の石なり享保のはじめ
霊験ありとて方に群集せり今一宇の香堂を建てられ安置せり
一蝶寺　同所東の方海辺新田藪の内にあり京師妙心寺流の禅
宗蒼龍山宣雲寺と号し元禄七年甲戌創建の梵刹なり卓禅
和尚開山たり英一蝶翁曾當寺に寓居し其頃の遊戯仏殿僧房
等の屏障悉く翁の畫なり故に世俗一蝶寺と字す（一蝶の伝は第三巻に詳なり）
同姫山法禅寺　同所南の小路にあり浄土宗にて京師知恩院に属す
本尊阿弥陀如来の像は佛工安阿弥の作なり（世に海中の霊像と称す）左右二十五
菩薩の像は雲中に羅列し常に行者を護念し湯殿の鮮麗
を摸擬す（興院と称するもの極楽上品上生の鮮相なり）開山は長蓮社英誉乙
阿上人と号す（慶長七年九月廿二日に化寂す）濃州恵那郡粕塚の住人俗姓は伊賀氏
小三郎五郎則俊と号す（伊賀左衛門佐則吉の三男なり後伊賀と小改す）弘治元年乙卯粕塚に

一城を築て江田の城と号けめとよ居住と
後出家して駿別よ至て中嶋と云ひ又用居を改て名良庵
と号け雲碩と改めて浄業を修行しるよ
御打入の頃道徳殊勝の空へある城以大江戸より江戸品川よりをひこ寺
境を湯ゆ 今品川宿 法禅寺 其後文禄二年癸巳道三河岸へ移され又柳原へ
地を賜させられたりしを孫よ天和三年よ至りて今の地へ移りしと
所城辺よりの頃正月三元日の間いてめりて鉦鼓を鳴さりしと
其間例る所ろひ今も正月三元日の空へ鉦鼓を鳴さりしと
龍徳山雲光院　光巖教寺と号と同所西よ隣る浄土宗江戸四箇
寺の一ある本尊阿弥陀如来の像い京師東山獅子谷恐徴上人
の作とい用山い還蓮社往誉上人潮呑和尚と号と　観智國師の法嗣
二家本願い阿茶局ある　甲州武田家の臣飯田氏後裔の孫同久左衛門某の女にて
同刑部少輔局い　大将軍家泥近の侍女よりて元和六年庚午
宗世の母　後ろよ後出家今川氏義元の士神尾孫兵衛久宗の室
女御　入内の時供奉の功よりて後一位よ叙せらる當寺創開の

物も黄金二多枚をつひ堂材をでし湯の
と云ひ　柳原堤の南よりし頃い尚寺と光巖寺と号ける
天和二年田禄の災よりある依おすし三年今の地よ移る　雲光院の二大なる
額い　後水尾帝の勅を奉して良恕法親皇筆を深られしと
昔い本堂よ掛る今い
尼山堂よ収てあり
五本松　同所小名水川通り大嶋小あり　或人云同名ある水と容るりと古江戸の
小名水川よ作る又世俗よ鍋屋と云ひ尚寺の南ある鍋屋の家ある　九鬼家の構の中より道路を越て水
俗間宗しし鍋屋と云へり
面を穫よ不の古松をいよ　昔い此川筋よ用し船の古松氏株まそあり　又此
川を隔て南岸の地い知恩院宮尊空法親皇御幽棲の舊跡ある
昔巻本不霊山寺の
系図を合せるへし
天王山霊雲院　清澄町大川の湾百年橋の南詰よあり禅宗はと
武別城生の龍穏寺よ属と本尊い聖観世音用出六枚出的東明
和尚と号く宝暦七年丁巳　合命あり依創建る不の蘭若
開基の年歴久しれよあらさるを
りて世俗深川の新寺と称へ


宮内神社

深川
霊雲院
霊雲院

芭蕉庵舊址　同し橋の北結松平遠州侯の庭中にあり古池の形今殘存せりといへ延宝の末桃青翁伊賀國より始て大江戸に入り杉風の家に入後剃髮して素宣と改む又杉風をうけて芭蕉庵の号を譲請夫れより後此地を庵を結ひ泊船堂と号す

杉風は俗称鯉屋藤左衛門と云

といへ江戸小田原町の魚屋なりし頃の藥かたうり後此業をもとりしの生涯に

魚もまた〳〵自水面に出る草覆ひ〳〵よりうり古池の如くにありしまゝに古池のほとりにあり

〳〵といへり

芭蕉を稱を辞

菊は東籬に咲竹は北窓に君とある牡丹は紅白の是非ありて世塵に汚さる荷葉は半池に立て水清きにされは花咲ものなれ年ゆや栖を此境に入ると時芭蕉一株を植る風に芭蕉のゆゑにけん枝株葉をそなへその葉茂りて庭にをせてあり萱の新陽もあらそはるるかりうり人皆草を根をうちて枯るゝを年〳〵に芽をうち出て芭蕉庵を破れんとせれいかれは離の隣に池をうへてやうり迫たく〳〵に雪の重ひ風のうこひるとに杉葉をうたるる紀筆のをさ〳〵もの書のとり松のひとりにありぬへ江に年こをた旅の憂のひたるとたり〳〵のうれ芭蕉のをとりひとうるゝぬ侘しさも孫よこ年の丑秋をうして物うひをそ〳〵今年六月のすゑ旅橋のうほひもさをうて

まをうゝされいく〳〵の繁りも昔よりうをうを牧此あらうえたらさゝて四位庵もまうちうを

三間の茅屋つたゝ〳〵う牧の枝ひとうを清ひうを芦垣あうをうゝ南に向ひ池に臨ひて水樓とるをとは池の富士に對して柴門景をすゝをるゝめ

なり衛江の粥三服の清よたゝて月をうゝ初月のゝうう雲をいとひ

雨をとうひひ月のこゝひよとそ芭蕉をうをと其葉ひうのしと琴をふりのう

たれを或いるうえ吹物て風鳥の尾を痛しめ青扇中のれて風を惜むなり〳〵花咲

も花をるゝと莖をゝれとも谷よりあゝとの山中不材の類ありたゝくてその性は

俗懷素の是よ年ををうらゝめ假横渠い新葉をえて後学の力とせとありコ子その

ゆゝうをとうとたうのゆけに拾ひて風あり被れ出をを出と以上

古池や　蛙とひこむ　水の音　同

花の雪　降かゝる上　野ゝ濃草　同

芭蕉翁かゝして鹽ゝ西を守夜　同

水月や　角へさゝゝる　沙ゝ　同

此身や　池に成ゝて　ゆくとうて　同

初雪や　さひさひ京に　ちりとあり　同

いづれも此地よりしるしの此孫なり

義仲伊賀國上野の產俗姓は松尾氏宗房と通稱は忠左衛門或は甚七郎とも号ること実は

中興の俳仙ゝ〳〵一流の祖たり業を捨て風月の才を学ぶ西行宗祇の

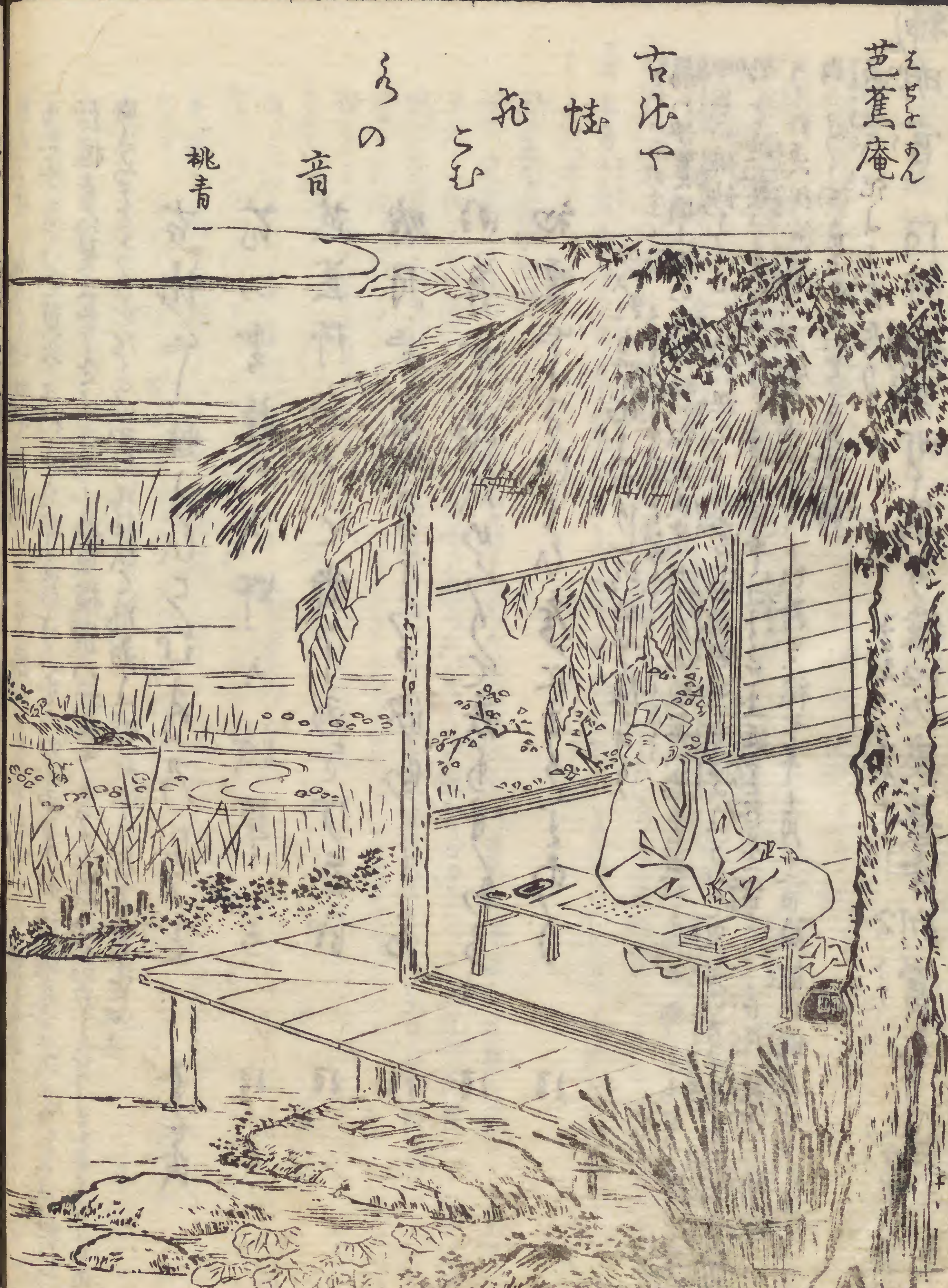
跡を追慕するの志ありて永を風雪にこ孫を生涯を旅を旨ゝ吉野龍田の花紅葉

うるれ更科紀行の月雪ゝ孫え禄七年十月十二日雜波の偶居ゝて才ゝ

ゆゝうゝ其角ゝめいせる芭蕉翁

後馬の記よりうたり

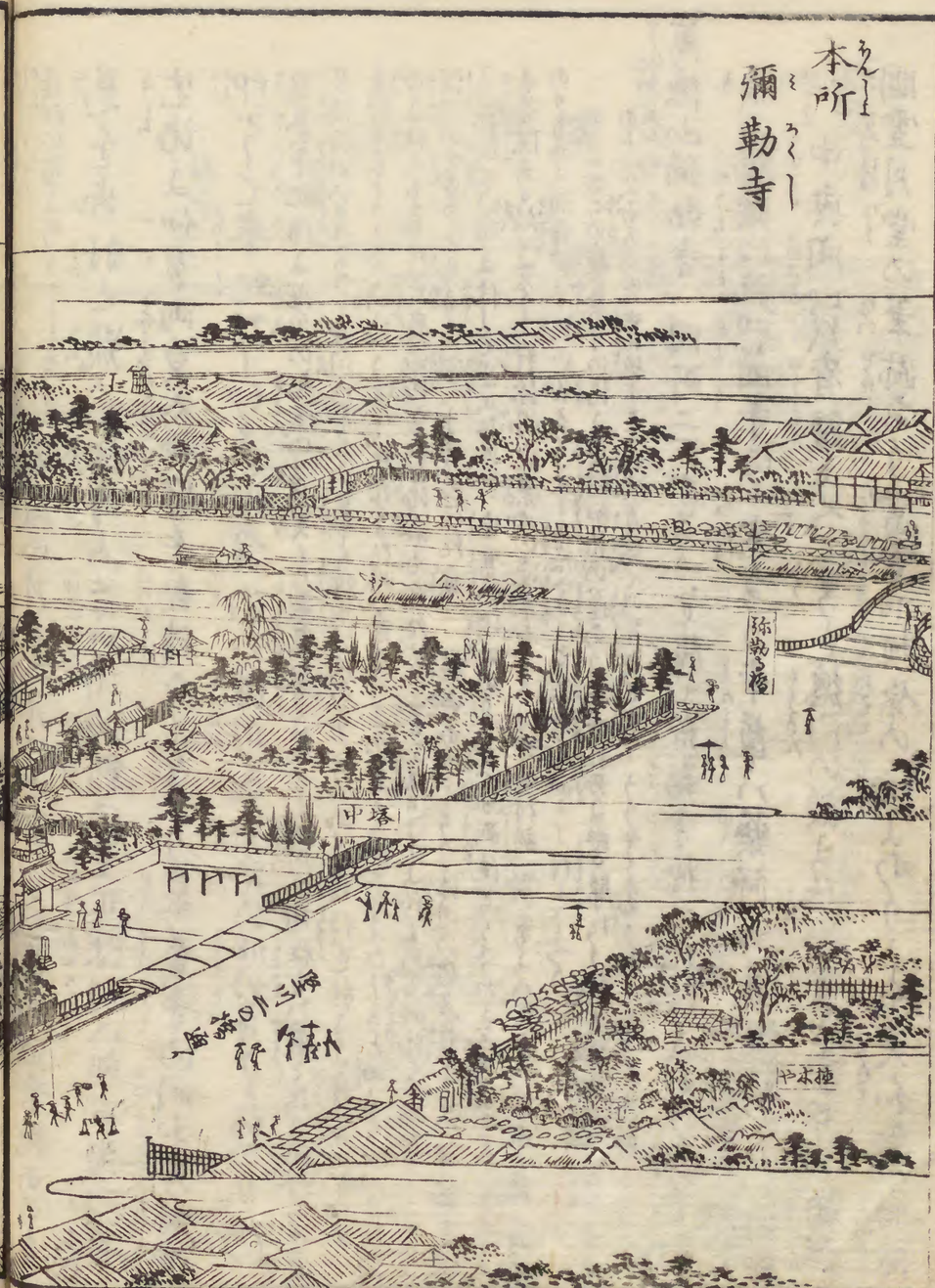
神明宮　同所森下町にあり猿江の泉養寺別當たり　天台宗東叡山に屬ゝこの寺

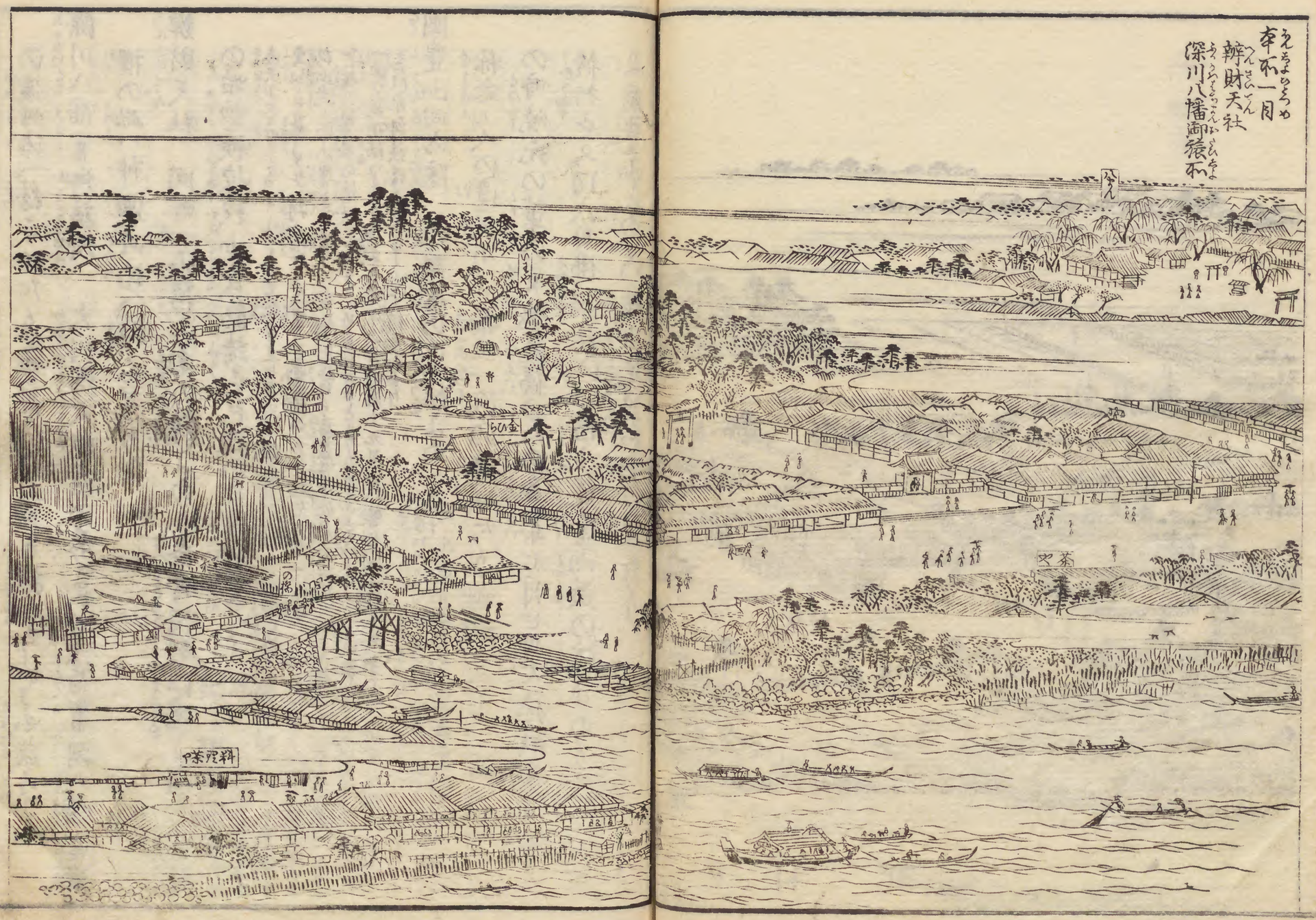


むかしハ社地より南へ行ての地の上にあり 満郎の地にありしとなり 毎歳正月と九月の十三日より舊式の祭祀あり 土人是を歩射と號く 相傳ふ昔此地開創の里正深川八郎右衛門某宅地に伊勢両皇太神宮を勧請せしなり 泉養寺の開山秀顕法印をして奉祀せしむるといふ 此地ハ深川氏宅地の舊跡なりといへり 附て云 泉養寺記録に深川の起立の事実を載す 其略に云く 深川の地往古ハ廣くたる原野なりしに 其頃摂州の産にて深川八郎右衛門と稱せる人ありて この地に居住を移さんと 慶長元年丙申 大将軍家こゝに遊猟したまひし時 八郎右衛門を召されて此地名を問せたまひしかば 更にこの地に住人もなく荒廢の地なれハ地名もなきよし答へ奉りしに 汝此地を開創し苗字を深川の文字を地名に唱ふべきよしとの厳命ありしより 深川の地名起りしとかや 八郎右衛門の子孫相継て此地に住して里正たりしが 宝暦の頃故ありて其家斷絶せりされど 泉養寺ハ八郎右衛門の香花院なる故に今も猶深川氏累世の墳墓存せり 同所砂村新田の東に八郎右衛門新田と稱する耕地あるも此人開發せし故の名なり 今土俗訛して其地を四十丁村とよぶなり 同所に云この泉養寺の池に重瓣紅花の蓮あり 花形牡丹に髣髴たり 故に牢花の時を待てこゝにめぐる人多し 寛政十年の晩夏初て此花を生ぜしより今に至り年々さかりて奇観とす

萬徳山彌勒寺 同所二丁ばかりを隔て彌勒寺橋の北詰にあり 真言新義の觸頭江戸四箇寺の一室なり 本尊ハ薬師如来 世に川上薬師と稱せり 伝記失たりとて其来由を知らず 初て中興開山成有鑁上人と号す 總門の額に彌勒寺と書せしハ朝鮮國雪月堂の筆跡なり 當寺舊柳原の地にありしを天和二年回祿

本堂
中塔
方丈


本所
彌勒寺
中塔
彌勒寺
中塔
中本堂


えんまどうの
本不一月
辨財天社
深川八幡御旅所
弁天
金ひら
料理茶屋

の後此地へ移されたり毎月八日十二日を縁日として祭請多し

深川八幡宮御旅所　大川端大船倉の前より富賀岡八幡宮祭

禮の砌八神輿此地へ渡らせらる

辨財天社　同所一の橋の南の詰より祭所相別江嶋より同し元禄

の始惣換校杉山氏勧請と已已の日参詣多し

志天竺に在りしとの事なれとも微し三七日の間飲食を断て相別江嶋より天女崎より参詣し

至心より其願を祈請せしに果して霊験あらたなりしかは今の地一丁四方

杉山流しとの慶安の頃　台命を蒙り屋敷を賜ひ泥近と元禄のころ今の地一丁四方

を賜ひ聾者の總帰とあるさしめられ又とあり清聚庵の地を左右合にをいて

一流の視矩法つまり毎年二月十八日六月十九日ゆへ聾者宝前に集会して琵琶を弾し平曲を

奏し京師検校塔舎ふるくして行ふ所なり

國豊山同向院　西國橋の東詰より

称念上人の遺風ゆへ捨世一流の佛域たり明暦三年丁酉の春大火

の時焼死の輩の冥魂追福のため毎年七月七日大施餓鬼法會を

後行と又同八日佛飯施入の檀主現當両益の法ゆへ總門の額

に國豊山とあるハ縁山定月和尚の筆なり

本堂　本尊阿彌陀如来座像壹丈許あり　元禄十六年のあく尚る回禄の災よりあらそひのなをる金

泥の阿弥陀仏坐像なり尚る第四世観誉上人祐盛和尚の御像の彼此をもて本尊とせしの堂もハ今の本尊を造立と堂のよなする

第三世唱霊和尚の

備中千體阿弥陀如来

後堂に安置と俗称して奥の院といふ

地蔵菩薩と同體なりとしの縁山二十三世の貫首遵誉貴屋上人念仏ゆへ明暦の大火の焼死

溺死せる死の十萬八千餘人の亡者を回向のあるへき旨　命せられ其頃　官府より假の佛堂を造営

せしめたまひしかの霊像を本尊とすと回向のあるへき旨

字元刑死の者の幽魂追福のあるへき旨

三佛堂　本堂の右より孫陀釈迦大日

等の三尊を安置ところの堂なり

一言観音　池の傍にあり不動尊観音惠心僧都の作なり南都招提寺より迎ところの有信の

表しなり

辨財天祠　日本よりの安置菓畏弁才天と称し尊崇寺の屋山上人勧行念仏の

しるしなり

佛堂の東より安置菓畏弁才天の御首なりを入れるを推知し新に佛餉を

馬頭観世音　本堂の東北の方にあり暦中

彫刻して小祠を営み尚るの護法神とあるなり

嘉永の名馬塚

吊の碑あり

台命あり

拝女某のとよりなりて作りたまへり

圓光大師堂　圓光大師堂

念仏の眼目なり

拝女尼を急告

おをつくねて全身を造りそなたりとなり

念仏の代て孫名と其蓮実の積るゆ三十五

を函たり

蓮池　信誓上人常に蓮実を蒔て念仏の代て孫名と其蓮実の積るゆ三十五

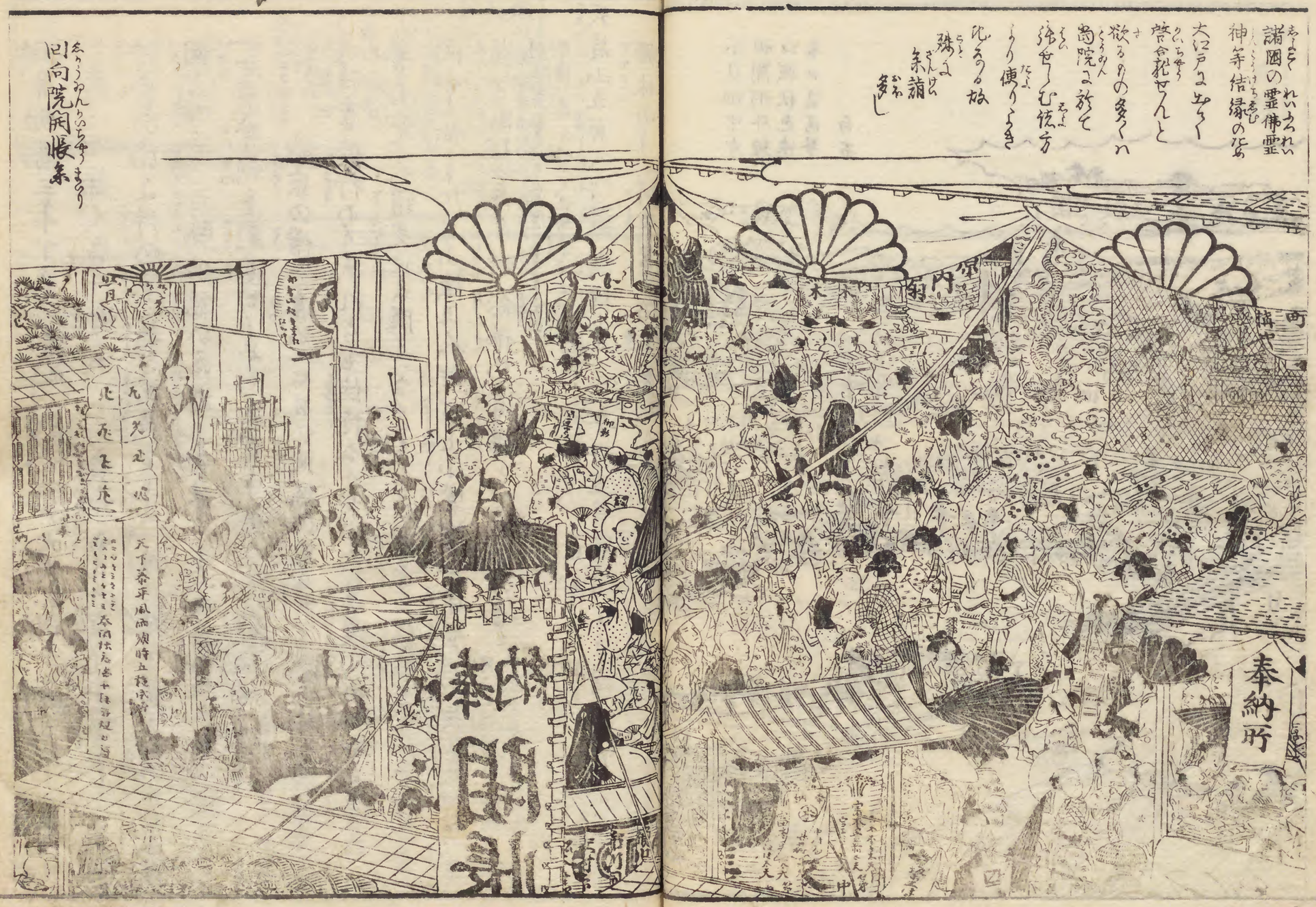
しと

樟　是も信誓上人手自植られしと　阿弥陀如来銅像　本堂の西面にあり

坐像一丈六尺あり

不見烟中寺
但聞烟外鐘
江城秋色遠
落日簸高峯
白石

回向院

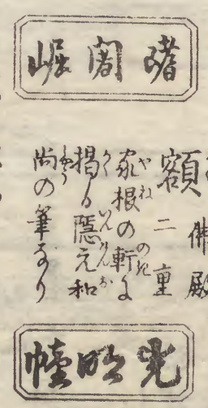

諸國の霊佛霊神等結縁の為
大江戸より出て
啓合祀せんと
欲るもの多くい
尚院より於て
絵せしむ依方
うり傳りうき
ひろうる如
殊より
糸靖
多し
奉納所
内
菊
木
町
内
奉納
日向院開帳条

相傳明暦三年丁酉の春（正月十八日十九日）大江戸大火に仍て焼死する者凡
十萬八千餘人なり時に
台命ありて此地をトして
詩歌の地よ件の焼死骸を埋藏し上に一堆の塚を築き號けて漏澤
園と唱へ乃亡魂追福の為増上寺第二十三世貴屋大和尚
一宇の梵刹を創基せしめらる當寺是なり
（昔の諸宗山亀縁寺とのかたりと陸奥大大の事実いむさしあんこと）
諸宗の僧を集め一七日の間塚の所に於千部の経を讀誦せしめ
大法會修行ありされとも住持なしして其頃小石川智香寺の信
誉自心上人道光世に隱れなきを當寺に移住せしめ第二世として
閻山と称したりの依上人彼塚上小堂宇を建營し長く幽魂の冥
福を助むる為不斷念佛の道場とせらるたり
（因に云信誉上人佛像を造る小形を得て恵心僧都の彫刻
則ち髪髭たり當院に安するなり）
（佛像の悲しく此上人の影造るとぞ）
天息山五百大阿羅漢禪寺　本所五目竪川より南にあり黄檗派の
禪林にして河東第一の名藍たり閻山の嶽眼禪師中興の祖先和尚又

猿江泉源寺の池に生ずるところの蓮花は重瓣紅花にして花形牡丹に髣髴たり故に奇觀とも寛政九年の晩夏
この花を
愛しうる
今よりは
まくにに
ちらり

猿江
摩利支天祠
霊験炳然として
信人常に絶ゝと
来由は拾遺に戸
名不品今こゝ
に略す

松雲禅師を以開基の大祖と称ス
佛殿 本尊 釋迦牟尼佛 拈華像 長一丈六尺下に巨石を畳く坐を做く 脇士 文殊
普賢 各高八尺 阿難迦葉 各高九尺 左右の階壇小列ヒる所の五百阿羅漢
の像は各等身にして共に松雲禅師彫刻する処なり
額 本尊の上に掲る黄檗隠元老人の筆なり
額 堂内の正面に掲る黄檗即非の筆なり
額 佛殿二重亦根の軒に掲る隠元和尚の筆なり
聯 同堂内左右の柱に掲る象牙の筆なり



五百羅漢造立之来由
松雲禅師は京兆の人寛雄にして正信を具ヒ或人云く松雲禅師始は俗務を
佛に帰し寛文九年己酉歳十二摂の端龍精舎に入て鐵眼禅師に
隨ひ薙髪して僧となる後游方の懐あるより師の許を辭して

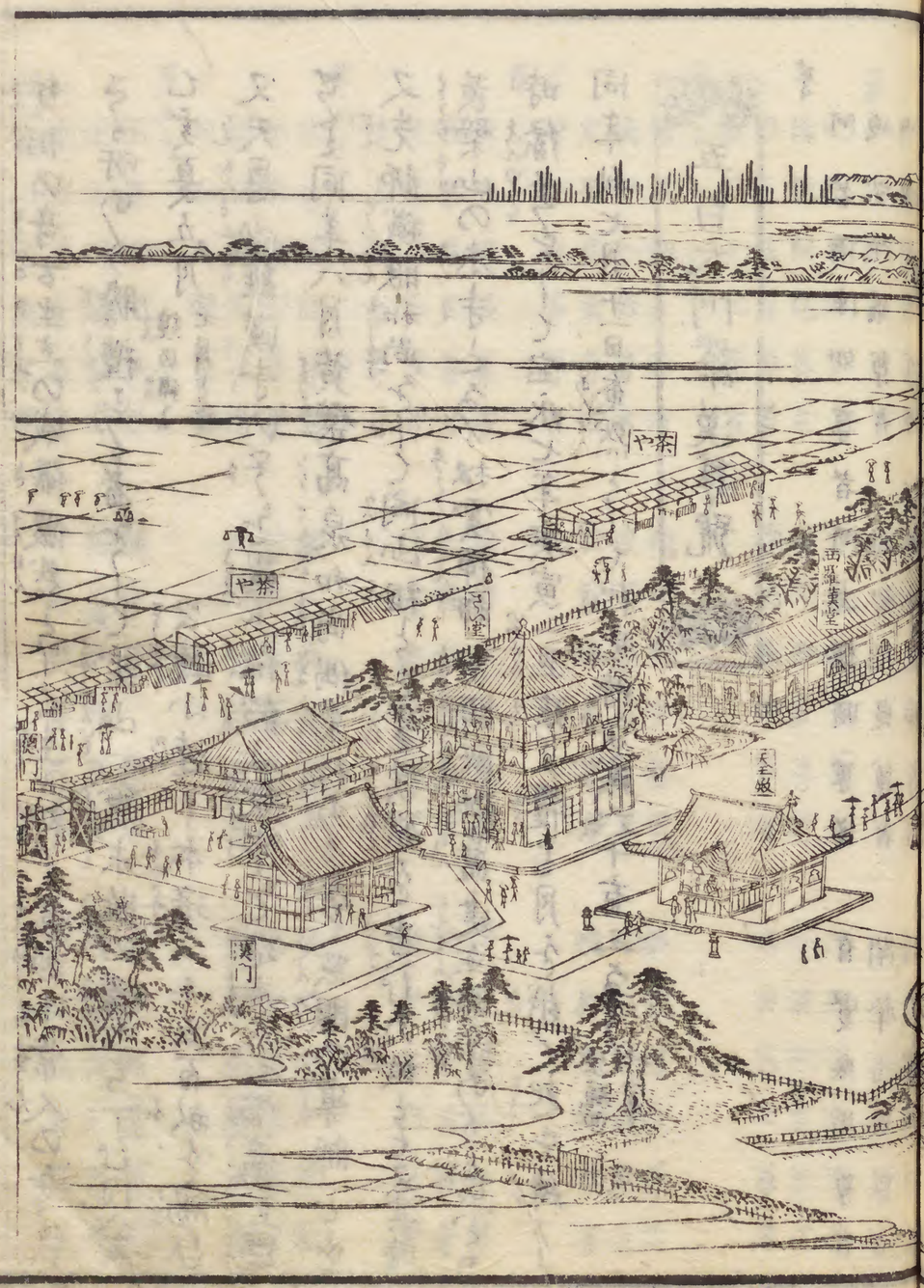
をみきの
小名木川
五本松

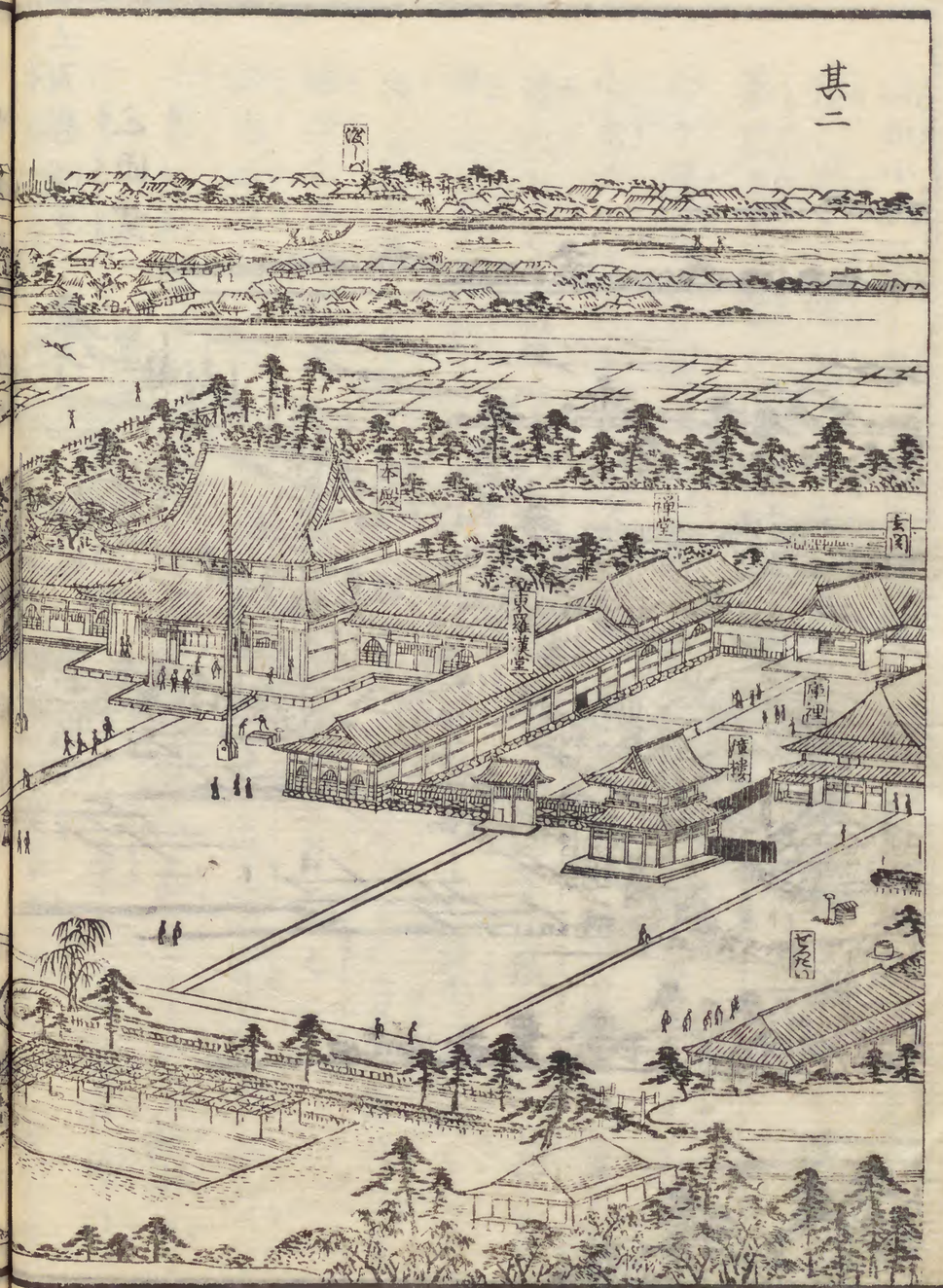
深川の末
五本松とかの
所よ船を
さして

川上を
とのの
かをしもや

月の
夜
芭蕉

海西小飄歴〻豊前國羅漢寺小至り唐土天台山の逆流並に賢
順といへる二僧一夜に造立せしといへる五百聖者の石像を瞻禮し
恭敬日〻小厚く其後潛に五百羅漢の像を手彫せんとするの意
あり歸省の日鐵眼禪師果して其命あるを以遂に貞享年間江戸
小未り元禄辛未始て浅草寺の境内壽松院に就て假屋を設け
衆人をすゝめ羅漢の木像を彫刻せ弘福寺の鐵牛和尚衣資を喜
捨し一尊を刻ましむるといへども時至らずして施あるの微〻たるに
歳月を歴たるを怪る小同壬申の年大倉前一十六負の道俗結盟
輔佐せ癸酉孟春に至り五十尊成甲戌三月泰も
御國毋桂昌一位尼公金を揚て佛像造立の資とるべし此時
十尊既に彫營せるありしより縁化響の愈〻るる如く施財日〻
小多く竟に一十餘霜を経て完〻本尊丈六の釋迦佛及び
阿羅漢等せて五百三千有餘軀の佛像縹緲として現せ其


茶や
茶や
西国観音堂
三堂
天王堂
裏門


其二
本殿
東国観音堂
禅堂
玄関
庫理
鐘楼
とんだ

梵相の奇古坐立の威儀儼然として生ける如く其妙手常人のをよぶ
さる所あり瞻禮する者をして霊山一會未散の嘆あらしむ因八年
乙亥夏五月（鐘の銘に七月とも）又聽小達一本境一千五百畝を湯ひ
又天恩山羅漢寺の号を湯ひ依假の堂宇を造立して佛像を遷
せり同年八月黄檗高泉和尚偶東行あり逗て點眼の導師となる
又先師鐵眼和尚をして両山祖となる是其原を貴むの故なり又其時
黄檗山の未寺となる松雲禪師其頃既伽藍建立の企ありとなす
時縁至りて宝永七年庚寅一旦疾よ罹て月を越て起を絶て
同年秋七月十日奄然として化せり時に歳六十有三なり（法臘四十二年）

五百大阿羅漢尊號

第一　阿若憍陳如尊者　阿泥樓頭尊者　有賢無垢尊者
須跋陀羅尊者　迦留陀夷尊者　聞聲得果尊者
梅檀歳王尊者　絶童無垢尊者　喬梵波提尊者

第十一　因陀得慧尊者
迦那行那尊者　婆蘇槃豆尊者　法眼四樂尊者
優樓頻螺尊者　佛陀密多尊者　那提迦葉尊者
那延羅目尊者　佛陀難提尊者　末田底迦尊者

第二十一
優波掬多尊者　僧迦耶舎尊者　教説常住尊者
商那和修尊者　達磨婆羅尊者　迦耶伽葉尊者
定果德業尊者　莊嚴無憂尊者　憶持因縁尊者
迦那提婆尊者

第三十一
破邪神通尊者　堅持三字尊者　阿蒐樓駄尊者
鳩摩羅多尊者　毒龍敬依尊者　同聲誓首尊者
毘羅眩子尊者　伐蘇密多尊者　闍提首那尊者
僧法耶舎尊者

第四十一
悲密世間尊者　獻花提記尊者　眼光定力尊者
伽耶舎那尊者　莎底茲蒭尊者　婆闍提婆尊者
解空無垢尊者　伏陀密多尊者　富那夜舎尊者
伽耶天眼尊者

第五十一
不著世間尊者　解空第一尊者　羅度無盡尊者
金剛破魔尊者　顯蘆世間尊者　無憂禪定尊者
無作慧善尊者　千劫慧善尊者　栴檀德香尊者
金山覺意尊者

第六十一 無業宿盡尊者 摩訶利利尊者 無量本行尊者
一念解空尊者 觀身無常尊者 千劫悲願尊者
瞿羅那含尊者 解空定空尊者 成就因緣尊者

第七十一 堅通精進尊者 薩陀波崙尊者 乾陀訶利尊者 解空自在尊者
摩訶注那尊者 見人飛騰尊者 不空不有尊者
周利槃特尊者 瞿沙比丘尊者 師子比丘尊者
修行不著尊者

第八十一 畢陵伽蹉尊者 摩利七佛難提尊者 三昧甘露尊者
解空無名尊者 觀行月輪尊者 金剛稍進尊者
方便法藏尊者 阿那邠提尊者
拂塵昧尊者

第九十一 摩訶俱絺尊者 辟支轉智尊者 山頂龍聚尊者 一象
羅網思惟尊者 切賓覆藏尊者 神通億具尊者
具壽俱提尊者 沙王菩提尊者 沙藏永切尊者
善注尊者

第百一 除憂尊者 大嚴土尊者 無憂自在尊者
雷音尊者 金髻尊者 香象尊者

第百十一 馬頭尊者

第百二十一 馬勝尊者 金首尊者 敬首尊者
自淨尊者 辦德尊者 羅提尊者
調達尊者 沙燈尊者 離垢尊者
寶幢尊者

第百三十一 善慧尊者 天不動尊者 善眼尊者 善調尊者 大光尊者
寶見尊者 寶勝尊者 慧積尊者 慧持尊者 勇寶尊者
明網尊者 道仙尊者 帝網尊者

第百四十一 寶光尊者 善住尊者 迅尊者 梵勝尊者 光曜尊者
修道尊者 大相尊者 善權尊者 摩帝尊者 慈寬尊者
持世尊者 光英尊者 教尊者 曇摩尊者 歡喜尊者
善思尊者

第百五十一 法眼尊者 明照尊者 普等尊者
直意尊者 無勝尊者
遊戲尊者

第百六十一 道世尊者

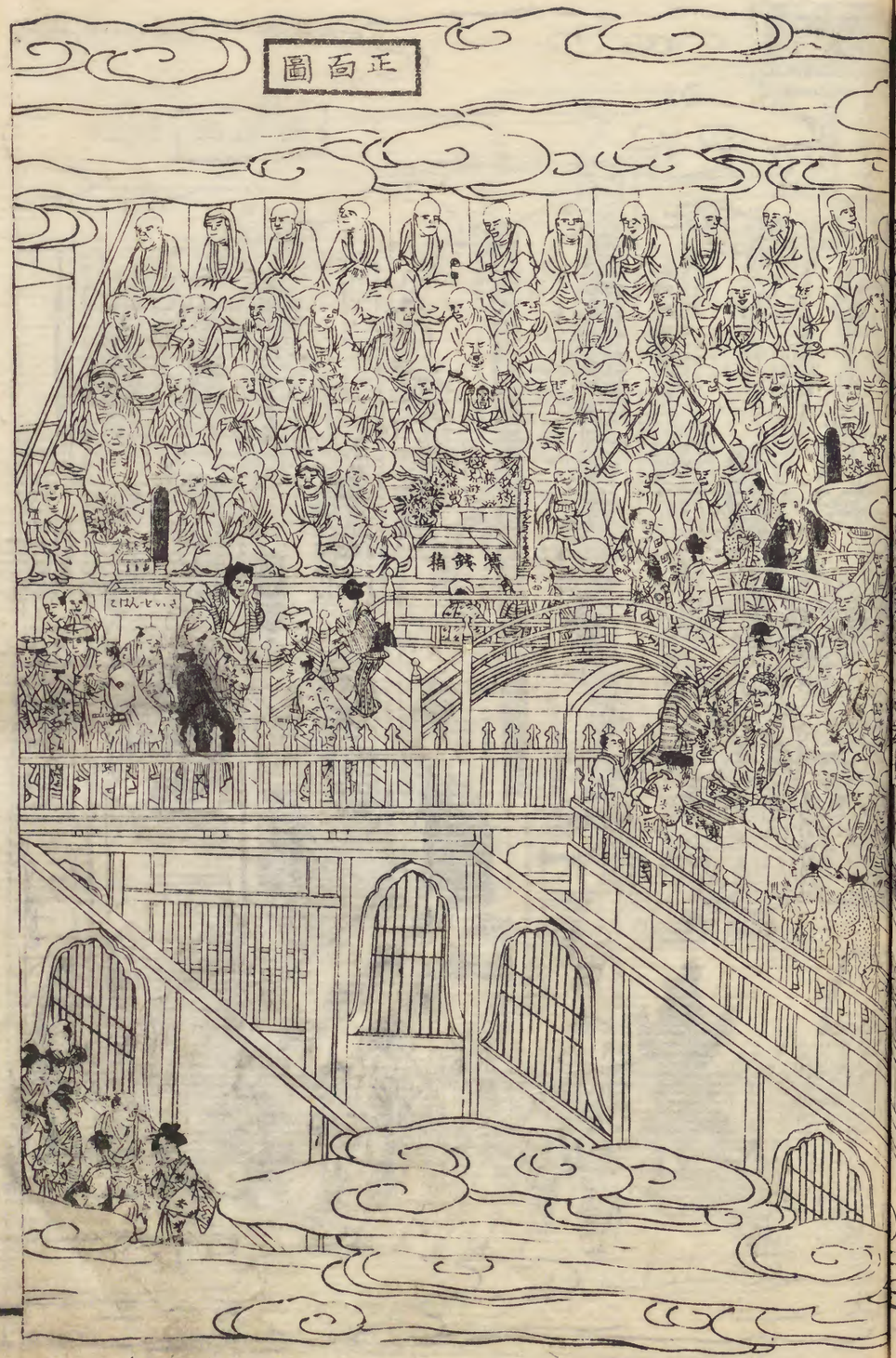
五百羅漢堂
内相之圖
共五枚

東漢東羅堂面之圖

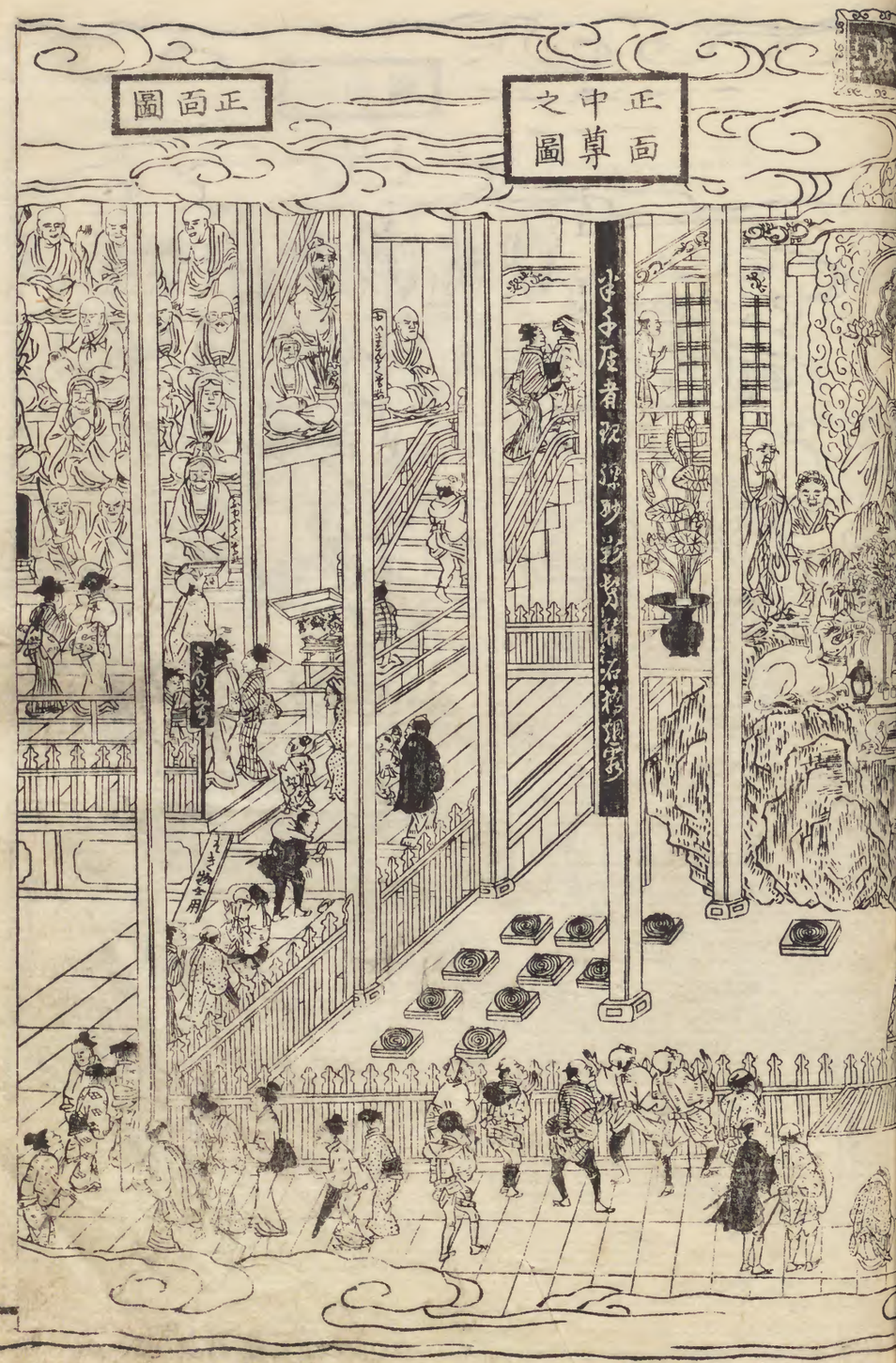
正面圖

国立公文書館
National Archives of Japan

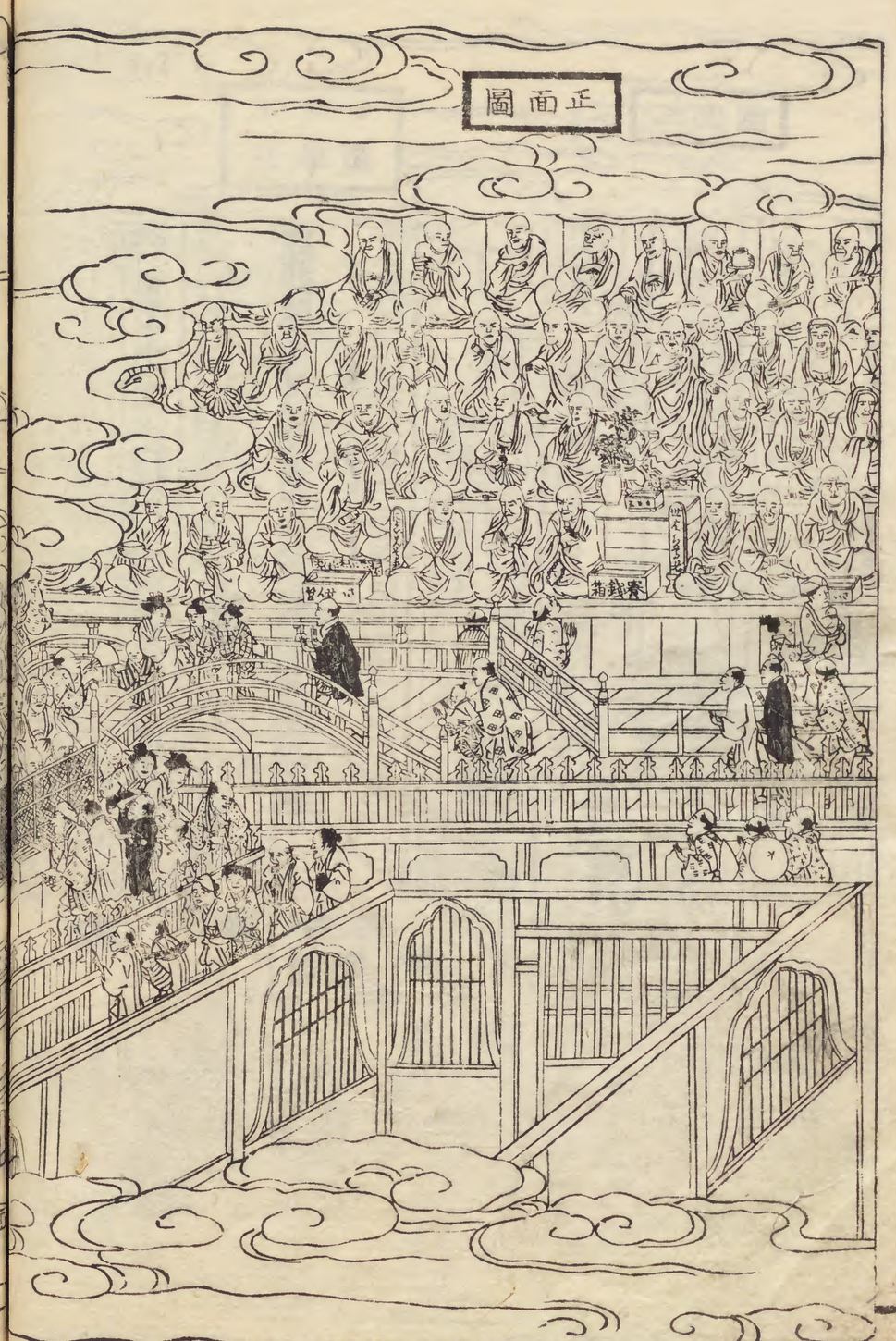
正面圖



東漢西之
羅堂面圖

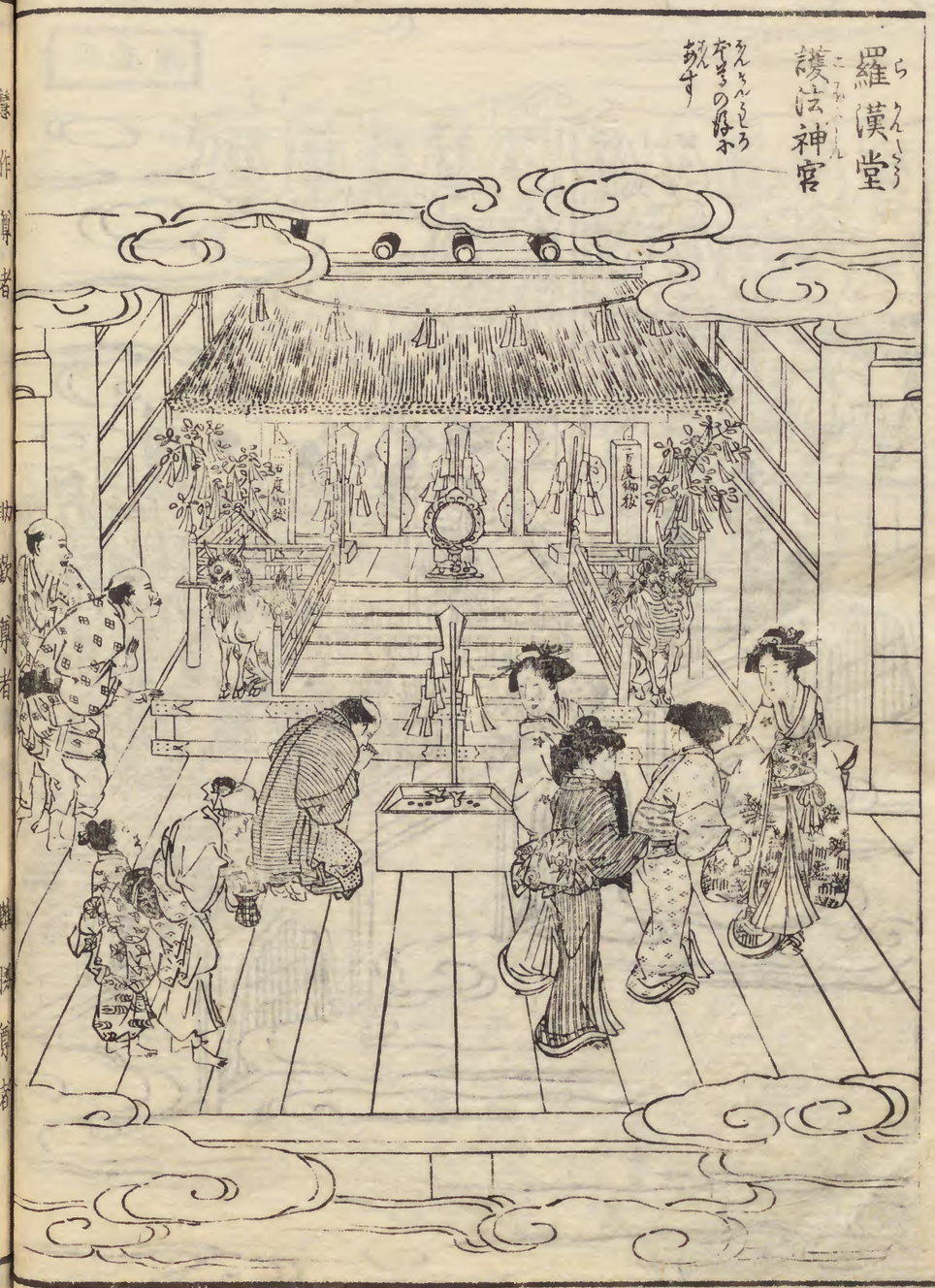

正面圖
正面中尊之圖

正面圖



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan



慈作尊者　助歡尊者　難勝尊者
善德尊者　寶涯尊者　觀身尊者
花王尊者

第百七十一
德首尊者　喜見尊者　善宿尊者
善意尊者　愛光尊者　花光尊者
善見尊者　善根尊者　德項尊者
紗臂尊者

第百八十一
龍盌尊者　佛沙尊者　德光尊者
散結尊者　淨正尊者　善觀尊者
大刀尊者　電光尊者　寶伏尊者
善星尊者

第百九十一
羅旬尊者　慈地尊者　慶友尊者
世友尊者　滿宿尊者　闍陀尊者
月淨尊者　大天尊者　淨藏尊者
淨眼尊者

第二百一
波羅密尊者　俱那含尊者　三昧聲尊者
菩薩聲尊者　吉祥兄尊者　鉢多羅尊者
魚邊身尊者　賢劫首尊者　金剛味尊者
來味尊者

第二百十一
婆私吒尊者　心平等尊者　不可比尊者
樂覆藏尊者　火焰身尊者　頗羅墮尊者

斷煩惱尊者　薄俱羅尊者
護妙法尊者　利婆多尊者

第二百二十一
寂勝意尊者　須彌燈尊者
彌沙塞尊者　善圓滿尊者
智慧燈尊者　楠檀藏尊者
香焰幢尊者

第二百三十一
阿濕卑尊者　摩尼寶尊者
利婆爾尊者　舍遮獨尊者
歡喜智尊者　乾陀羅尊者
須彌望尊者

第二百四十一
持善法尊者　提多迦尊者
智慧海尊者　衆貝德尊者
彌遮仙尊者　尼默伽尊者
淨菩提尊者

第二百五十一
梵音天尊者　因地果尊者
精進山尊者　魚量光尊者
脩善業尊者　阿逸多尊者
聖峯慧尊者

第二百六十一
曼殊行尊者　阿利多尊者
衆和合尊者　法魚住尊者
如意輪尊者　光輪尊者

沒特伽尊者　福德首尊者
波頭摩尊者　斷業尊者
迦難留尊者　涉伽陀尊者
水潮聲尊者　覽性解尊者
不思議尊者　不動意尊者
首正念尊者　孫陀羅尊者
法輪山尊者　魚比敎尊者
天鼓聲尊者

第二百七十一
利婆多尊者　普賢行尊者
威德聲尊者　普利婆多尊者
阿那悉尊者　普勝山尊者
行化國尊者

第二百八十一
聲龍種尊者　誓南山尊者
行傳法尊者　香金手尊者
光普現尊者　慧依王尊者
首飯光尊者

第二百九十一
持大醫尊者　藏律行尊者
眼龍王尊者　闍夜多尊者
義法勝尊者　尼婆羅尊者
王住道尊者

第三百一
無垢行尊者　可波羅尊者
禪定果尊者　不退法尊者
達磨眞尊者　持善法尊者
心勝修尊者

第三百十一
會法藏尊者　常歡喜尊者
頭陀僧尊者　議洗腸尊者
無垢藏尊者　降伏魔尊者
金富樂尊者

持三昧尊者　冨伽耶尊者　德自在尊者　聲飯依尊者　威儀多尊者
名無盡尊者　摩揭羅尊者　秦摩利尊者　僧伽耶尊者　德淨悟尊者
辨財王尊者　降魔軍尊者　闍提魔尊者　受勝果尊者　阿僧伽尊者

第三百二十一
頓悟尊者　周陀婆尊者
燈導首尊者　甘露法尊者
須達那尊者　超法兩尊者
第三百三十一
堅固心尊者　聲響應尊者
壞劫空尊者　光明燈尊者
功德相尊者　怒生心尊者
白香象尊者
第三百四十一
識自生尊者　讚歎願尊者
聲引衆尊者　離淨語尊者
鬱多羅尊者　福業除尊者
大藥尊尊者
第三百五十一
勝解空尊者　修無德尊者
月蓋尊尊者　摩羅尊尊者
菴羅滿尊者　項生尊尊者
直福德尊者
第三百六十一
須那刹尊者　喜見尊尊者
提婆長尊者　成大利尊尊者
蘇頻陀尊者　衆德首尊者
鞞伽梨尊者
第三百七十一
日照明尊者　無垢藏尊者
無量明尊者　除衆憂尊者
光明網尊者　善修行尊者
無憂眼尊者
第三百八十一
去蓋障尊者　自明尊尊者
淨除垢尊者　去諸業尊者
無盡慈尊者　興陀怒尊者
行願持尊者
第三百九十一
天眼尊尊者　無盡智尊者
寶蓋尊尊者　神通化尊者
喜信靜尊者　摩訶南尊者
金光慧尊者
第四百一
伏龍施尊者　幻化空尊者
蓮花淨尊者　拘那意尊者
利亘羅尊者　調定藏尊者
天音聲尊者
第四百十一
大威光尊者　自在主尊者
最上尊尊者　金剛尊尊者
最無比尊者　超絶倫尊者
持世界尊者
第四百二十一
定花至尊者　無邊身尊者

第三百二十一
住世間尊者　除疑網尊者
自在王尊者　無垢德尊者
德紗法尊者　坐清涼尊者
第三百三十一
應赴供尊者　和倫調尊者
執寶炬尊者　慈仁尊者
阿氏多尊者　那羅達尊者
第三百四十一
定拂羅尊者　編貝足尊者
鳩舍尊者　思善識尊者
羅餘習尊者　無量光尊者
第三百五十一
喜無著尊者　金剛明尊者
心定論尊者　賢首尊者
薩和壇尊者　無垢稱尊者
第三百六十一
章法首尊者　明世界尊者
藍王尊者　燭慢意尊者
金剛藏尊者　月菩提尊者
最勝幢尊者

棄惡法尊者　無礙行尊者　普莊嚴尊者
無盡慈尊者　常悲愍尊者　大塵障尊者
光焰明尊者

第四百三十一

智眼明尊者　堅固行尊者　澍雲雨尊者
不動羅尊者　普光明尊者　心觀淨尊者
那羅德尊者　師子尊尊者　法上尊尊者
精進辨尊者

第四百四十一

樂說果尊者　觀無邊尊者　師子翻尊者
破邪見尊者　無憂德尊者　行無邊尊者
慧金剛尊者　義成就尊者　善住義尊者
信證尊尊者

第四百五十一

行敬端尊者　德善洽尊者　師子作尊者
行怒慈尊者　無相空尊者　勇猛進尊者
勝清淨尊者　有性空尊者　淨那羅尊者
法自在尊者

第四百六十一

師子頻尊者　如意雜尊者　大熾妙尊者
音調敏尊者　大賢光尊者　摩訶羅尊者
分別身尊者　師子臆尊者　壞魔軍尊者
智仁慈尊者　淨解脫尊者　質直行尊者
具足儀尊者　寂靜行尊者　大高遠行尊者
卻寶那尊者　普滿光尊者

佛智尊者　寂靜行尊者　常真常尊者
破冤賊尊者

第四百八十一

滅惡趣尊者　性海通尊者　法通尊者
慈不息尊者　投衆心尊者　導大衆尊者
常隱行尊者　菩薩慈尊者　拔衆苦尊者
尋聲應尊者

第四百九十一

數却定尊者　注法水尊者　得定通尊者
慧廣增尊者　六根盡尊者　拔度羅尊者
思薩埵尊者　注茶迦尊者　鉢利羅尊者
願事衆尊者

以上第五百竟

十大第子

大迦葉尊者　舍利弗尊者　目揵連尊者
阿那律尊者　須菩提尊者　迦旃延尊者
阿難陀尊者　富樓那尊者
優波離尊者　羅睺羅尊者

十六阿羅漢

賓度羅跋囉墮闍尊者　迦諾迦伐蹉尊者
迦諾迦跋黎墮闍尊者　蘇頻陀尊者
諾矩羅尊者　跋陀羅尊者　迦理迦尊者
伐闍羅弗多羅尊者　戍博迦尊者　半諾迦尊者
羅怙羅尊者　那伽犀那尊者　因揭陀尊者
伐那婆斯尊者　阿氏多尊者　注茶半託迦尊者

以上十六竟

三帀堂　絡門の内左の方天王殿は観音奥塗観音を安置し孫陀勢至
此堂を模擬して百軀の観音を安置す上繞は西國中繞は坂東下繞は扶桑坂上百番の札所
當寺中興象先和尚二支を擬し上の法式は右繞巡迴を最勝第一とす二階の高樓は
とりて寛保元辛酉冬を造営せられたり右繞三迴はこれを其機巧称するに堪へり
俗間呆螺堂と唱へ後世三迴堂を造の規範とせ

額　向拝の内了　掲ぐ當寺雪村和尚の筆なり

右繞三帀堂

額　同堂二階の軒に掲ぐ當寺象先和尚の筆なり

回廊

天王殿

扁は呼右より並に内より行山寺の布袋和尚護法関帝を安置し傳默天昆沙門僧長谷の三天を安置せり各松雲禪師の作なり

額　天王殿の軒に掲ぐ當寺笠別和尚の筆なり

天恩山

禁石　羅漢堂内にあり

刹竿　扁は呼左右より建は享保十三年三月より建初ることなり

禪堂　扁は呼右の方の後にあり

額　扁は堂の軒に掲ぐ黄檗木庵の筆なり

遊佛場

摂待所　扁は呼左より

額　軒に掲ぐ細井九皐の筆なり

藤棚　用腰掛の傍

四年己未是を栽しめたり

鐘楼　庫裏の前にあり元禄九年牧野備後侯成貞の令室高祥院殿ふれを建

突茶

天恩山五百大阿羅漢禪寺鐘銘并引

武藏國天恩山五百大阿羅漢禪寺者元孫年中沙門
松雲創建也辛未春松雲從京師來謂老僧云孫子福
自幼好彫像今發志願欲刻五百應真爲衆生之福
田然福菲緣微仰冀和尚慈悲運大方便俯賜冥助
老僧嘆曰此願甚難得成與不成必不在福緣多少
全在願心實與不實耳厥志誠實則福緣在衆生莫
慮之矣老僧應爲子發軫也遂捨衣資彫孫一尊又
勸諭瑞聖極法孫彫一尊至癸酉孟春成五十尊請
老僧默眼供養有震動飄雪之瑞此日經始丈六拈
華之像甲戌三月國母桂昌院大夫人得賜金彫菅
十尊也自爾展轉勸化三五年之間其願殆乎成實
不可思議哉功既聞上乙亥秋七月遂賜地八月
黄檗高泉和尚偶在官府請默眼供養丈六拈華之
像丙子夏四月就新開大阿羅漢寺啓建旬日之法
會項禮三千之聖號普請四衆大伸供養亦請老僧
拈香凡百官士庶長幼皂白皆趨赴勝會而隨喜之
豈非希世之盛事乎哉松雲者乃予法孫鐵眼和尚
之徒旦爲人淳朴寛量大度百競來絶魚瘦僊之
色若不如是馬得全這般大志願也其功其德縱使
經于千古亦何遷乎茲牧野氏從四位下備前守
成貞公室氏法諱高祥院殿靈慈大姉捨金鑄大
鋼鐘成之日請老僧始撞之旦乞銘因爲銘曰

武陵海上新創禪園　欲鑄蒲牢鳧氏丕屯
大冶鑄就響震鯨鯢　大千是口山河倒吞

一音纔動警覺曉昏　修洪規範解塵勞煩
観音大士如入此門　回通無礙卻慈聞根
幽明莫滞功德難論　申聲生悟直證本源
存没俱利消融百寃　國平民豢斯子斯孫
雲禪功烈函盍乾坤

元禄九年丙子四月穀旦　牛頭鎮牛機謹誌

接樹

境内よりゑ文五年庚申接樹九十餘株を挑のゝ手元文紀元丙辰當寺の境外南の方のこゝもよられを栽しめつゝ

鹿山堂

隱栖の地なりとゝ丈の東よりゝ此地に立て保十八年の頃鐵眼禪師當寺を退玄の後鐵眼禪師の行狀を按列殘紀寺の禪文に詳なり鐵眼の像を亟者よ三代堂とも唱へ山象先和尚なゝひよ松雲老人ホ中興象先和尚ハ黄檗四世の法孫ゝて鐵眼禪師の法脈たり

當時松雲禪師化寂の後ハ假堂も破壞ゝ佛像も雨露の苦ゝ患ゝ正德三年癸巳本師鐵眼禪師ゝよ信されたゝを深く患ゝ和尚の命を受始て大江戸よ来り當寺よ住を享保二年丁酉正月ゝ十有餘年の間心肝を碎て寒暑風雪の厭なく日ゝに廊下の街市よのて行乞ゝ既ゝて勸進の功成募を受る所の一握一投の米錢を積て甚料に充同十年乙巳よ至り今存ゝる所の佛殿僧房悉く建立成就せゝ依同十四年己酉二月閑堂惣供養の大法會を行ひゝ盂蘭盆の大施餓鬼會を閑堂當寺閑山ハ象先和尚たるゝ甚徑顯無たりとゝも故ありて鐵眼禪師を冨山ゝ自の師寶刹和尚を二代ゝ又松雲禪師創業の大功あるを以一代開基と稱し自三代の席よ坐ゝる隱元禪師歸化の後ハ持齋一食ゝて深く貧者をのゝれゝ佛像經卷と古代袈裟の外ゝハ聊も所よ貯ふる事なゝ日ゝの勤行ゝハ般若經題分五卷と花嚴經行願品百五十卷ゝを讀誦ゝ觀音の尊号を書寫ゝるゝ甚數積て山の如ゝ又大般若經一部六百卷一字百禮ゝて是を書寫ゝ甚先生乳得道の時接引靈寺よ入て法道成

就の誓願を發し二年の間双手の指紙切八十卷の花嚴經を
血書し其後當寺殿堂の營大半成といへども宗門の坐禪
夏冬の結制行れさるを闕典なりとて依後住宗朝所命
を受て元文二年丁巳の冬洞海両首坐を立て五千指の僧を
集め江湖の大會を行ふ此時　大樹てよ面々せたりとて
坐禪の行相成さるるのみなれとも則江湖の僧財として米五百俵
をたまふ夫より後般若の全文を真讀して祈れを我す
竟て寛延三年巳丑六月五日七十三歳にして涅槃の大定
に入貴殘香苑を棒ひとはしとも来る十三日三夜奏暑甚
しといへとも遺骸聊変る色なく茶毗して全身舎利となる
其舌根は宝塔に収て今於中興堂に存せり
當寺は黄檗泒江戸最大の禪園にして佛閣の巍々たるは
用城にかくれなし元禄年間寺領山林を賜り寛保九

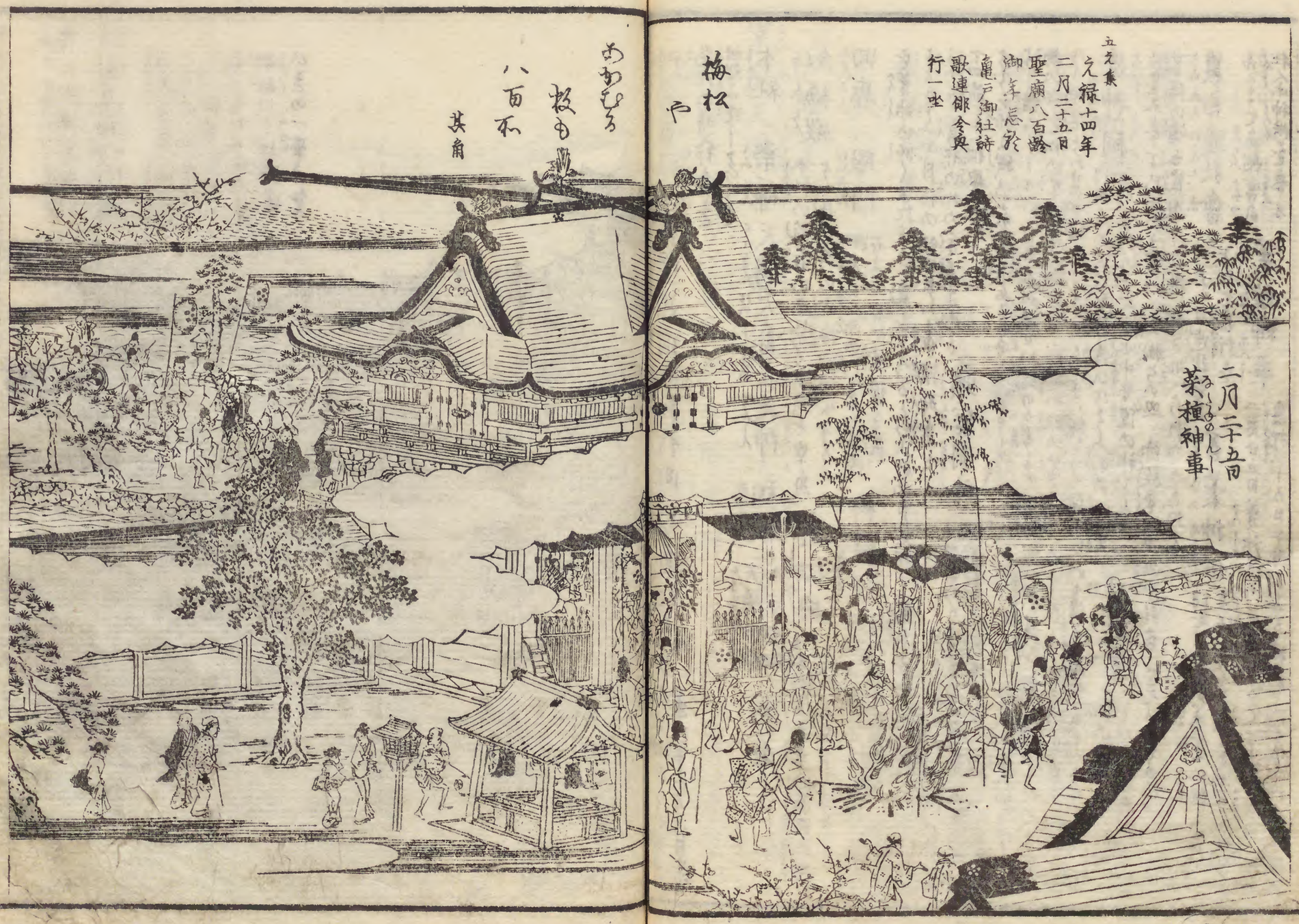
其二

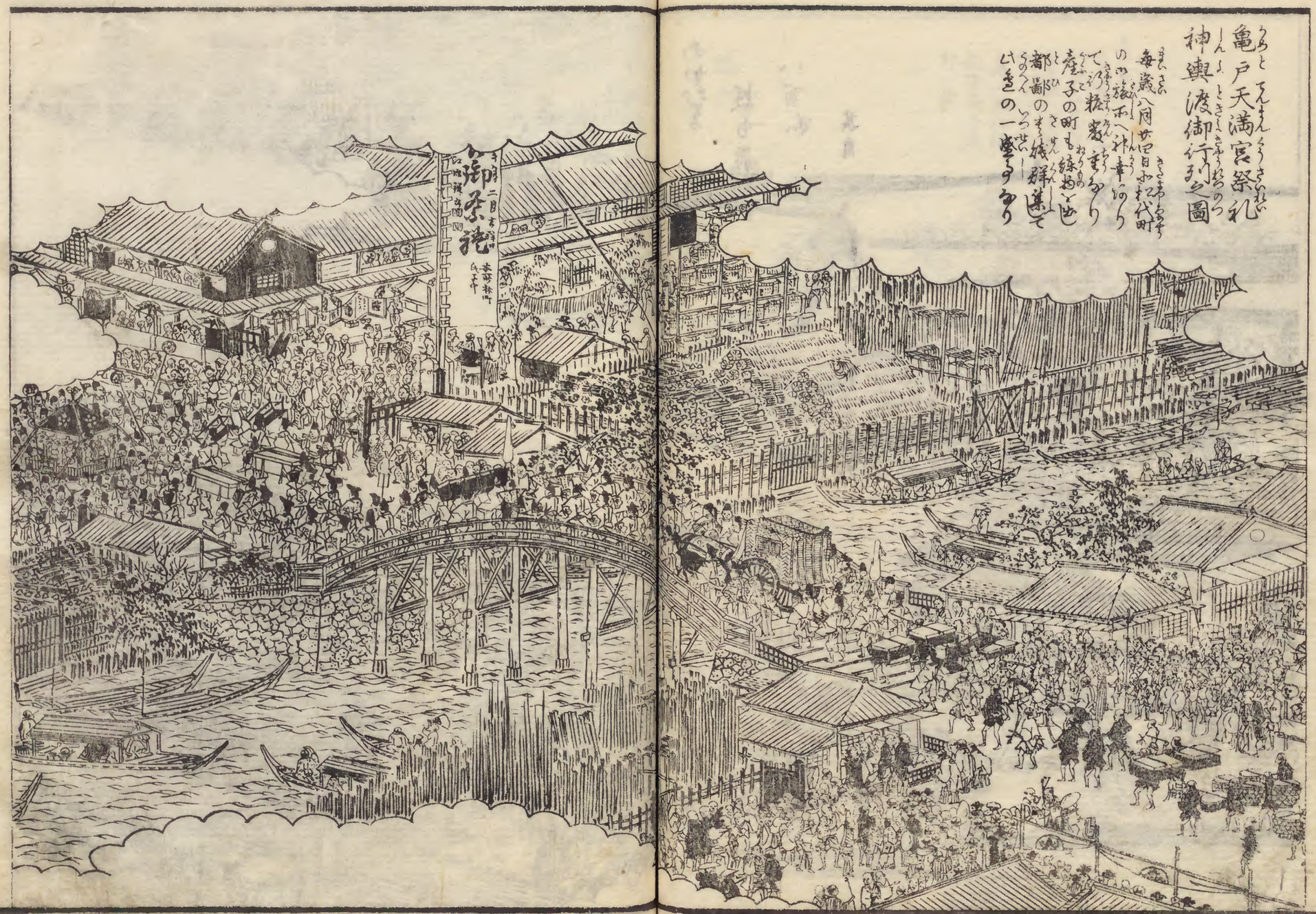
年甲辰十二月　大樹始て當寺へのぼられ其後同十五年正
月晩課　御聽聞　翌年十二月方丈より於隧坐住持象先是を
勤む同十九年甲寅三千畝の地紙添あり同二十年乙卯境
内より新殿を營せられまゝ後此地より　御放鷹のお場を
ゆるされ當寺へ立寄せられ月毎の報日の
觀音　懺法を修行し十六日より大般若經轉讀あり七月
より毎夕施餓鬼を修し十六日廿一日廿五日晦日の殊より
道俗羅漢を象先師より已來當寺の住持い風雨寒暑
を厭いなく大江戸の市中を行乞するをもつて勤行
とす

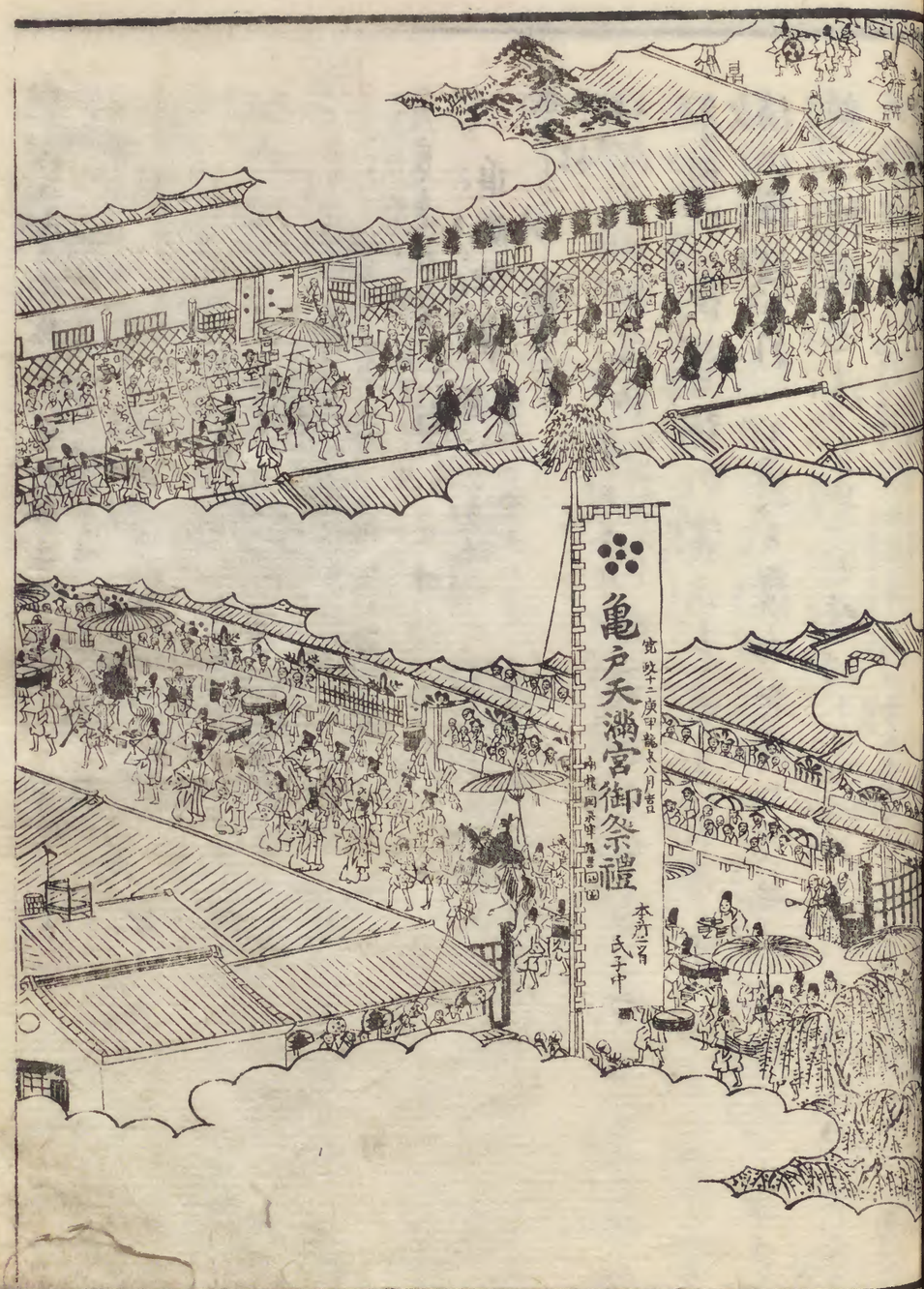
宰府天滿宮　亀戸村より坂より亀戸天滿宮とも唱へ
別當を天原山東安樂寺聖院と号し司　勝巖司
大鳥居氏奉祀せり　當社別當の柳宮　正月十二日　御神楽　御連歌百韻奥行と

所の當社の南竪川通北松代町四丁目にあり　流れ橋板寺の横あり　藥師堂あり八月晋
祭礼の時神輿を此処より迄しまつる

本社　祭神　天滿大自在天神　相殿　天穂日命　土師宿禰　三坐
紅梅殿　本社の前右の方にあり流前太宰府より載せ所の紅梅の種木なり
回廊　瑞門　回廊の正面の門をいう左右より隨身の木像を置　御嶽社　本社の右にあり嶽山の座主法收修する意僧正の靈を勧請
大樹の四　御放鷹　花園社　本社の北野の一夜松を栽し　花園社の北の右
を菅神の呼こなりて是をまつる卯の日を以て御放鷹とす　正月初の卯の日い奉請羅集せり　頓宮明神　日呼よりあり昔菅神流罪の時
正月初の卯の日い奉請羅集せり　頓宮明神　日呼よりあり昔菅神流罪の時
十四前を拘殿とす　頓宮明神　日呼よりあり昔菅神流罪の時
より情るくすれと其家の老女いたるの者なして暴の上より新薦を敷て清したてまつる
麹の飯を松の葉より盛て捧たるに志いたの葉の色とのくすひしとある清を表し
邊神　祠　日呼よりあり菅神遊ひたるの所の老婆の縄をもて神
をあがたりとなり水中守護の神とす　岳明　連歌家　此の西よりあり此郷
延宝五年丁巳二月十二日　大樹この四　御放鷹の時此連歌家より
享保の頃も宮府より彼地を加へられたりと　連歌家より
裏向連歌會　正月二日連歌家より若菜神供　日七日今朝若菜の餅をたく
正月二日連歌家より奥行と
菜種神事　二月廿五日菅神の御忌よりして二十四日通夜連歌
奥行二十五日午時より神菜よりを社人等梅の
社人ホ神供を奉る　朝宮司


五えん集
えん禄十四年
二月二十五日
聖廟八百歳
御年忌ゟ
亀戸御社詩
歌連俳会奥
行一坐
梅松
二月二十五日
菜種紳事
あかもの
数も
八百不
其角


亀戸天満宮祭礼
神輿渡御行列之図
毎歳八月廿四日和代町
の四社へ神輿ゟ
て粕壁
産子の町も練物と也
都鄙の
ゟ
ゟ
の一
御祭礼


亀戸天満宮御祭禮

芝神御祭禮

枝を折梅花の形に二十八首を披講を又夜に入て宮司社人松明を照し拂と常に
祈祭と本社より少宰の沈をめり樓を飛て鳥門より入社前より松明を積に是を焚
らの祭りを所司と云ふ宰府の形を　雷神祭　四月初日より七日に至
うらを所司と云ふ　神所衣　四月晦日と九月
たんなる　名越祓　六月二十九日　毎日の夜所衣を
よりて　名越祓　六月二十九日　川の西大河口
にて中臣祓を　七夕和歌連歌會　七月七日に
祭禮　閏年八月二十四日より　後水尾帝の勅許よりて當日陸川通小松代町の所張所神幸の日歸輿
進ぜむ壯觀　列當大鳥居氏東車を生子の所にうつりて祈輿供奉の行粧を
うきくうり　翌二十五日より　祈祓講社頭よりひく行
月見連歌會　九月十二日　火燒神事　土月廿五日より　年越神事　十二月晦日
通夜後
節分の夜後水尾帝の勅許よりて當社の祭式いとて宰府の例に准ふ一社の法式あり
追儺神事　其餘一季の中祈祭多しといへども異
雅ゝて他より異なる
社記云用祖信祐　菅原善外の苗裔なり　始祖前大宰府よりし須正保三
年丙戌一夜菅神の靈示を蒙る甚夢中　十立て宗の
梅の雅枝れ　とゝる發句を得たり依其後赤梅を以て
新に神像を造り是を獲ゝして江戸より彼天滿宮を今
の亀戸村に勸請せ　初勸請の沈い今の宮居より東南の方耕田の中にあり
其後寛文紀元辛丑　台命を蒙り同年壬寅始て今の
沈を湯の同三年癸卯宮居を營ゝ心字の沈樓門ホを
く社頭の光景宰府の侍を摸せり依は十一年辛巳
後水尾帝震翰を灑て菅神のそる號をやしのみ又え祿
十年丁丑一社の神事法式等宰府本宮の例に准せ
同帝の勅許を蒙る爾来神威顯祿として靈驗眼
著ゝり當社至寶と稱せるのい菅神佩せるの天圖
の寶劍なり
福聚山善門院　善應寺と呼ゝ同所一丁ばかり東の方にあり
芝云宗の所ゝて今大日如来を本尊ゝと
海に寺産義干を湯ゝ永く　慶安二年己丑住持沙門宗賢情
番燭の料に充ゝ　給の餐あゝとゝて
御腰懸松　堂前にあり昔　大樹　御放鷹の砌　御腰を　慈眼水　は所ゝ
に用の番門慈眼の意を　故ゝの名あり

普門院

身代観世音菩薩 当寺安置の観世音なり

縁起云大永二年壬丑千葉氏中興なり自胤兼胤の孫なり季胤の三男なり三膀の城中より一宇の梵刹を開き此霊像を安置し長賢上人を請して始祖

今の普門院これなり三膀とは隅田川綾瀬川荒川の落合ひ三俣なるを隅田川の東に当る所なり其比善光院の邸と称し

うるおいをいとり昔千葉氏在城の地なり其比善光院の邸と称し

洪水に流れしも後新田義貞堂塔を造り妖蟒洪水に流れしも後新田義貞堂塔を造り洪水に流れしも其跡を名づけて撞木倒と呼ぶ元和二年域主任務の命によりて三膀の城を移し寺院を今の亀戸の邑に移し

往古千葉自胤の臣佐田

往古千葉自胤の臣佐田

当寺新撞の縁起詳なり

善次盛光 後羅髪と号せり 慧と号せり

虚名の罪にて

不の此霊像の加護にて其白み段々に壊し危難を逃れたり

此霊験あらたかなる自胤三膀の城中に当寺を創し長賢上人を導師として旦那組とし

又天文三年関中大に疫疾流行し死に至る者少からざりしに此霊像を念する輩は悉く病

平癒し病に臨む者は病者と床を等しくしても敢て染

延の患なし其後住持長栄上人睡眠の中一老翁の来るあり

善い是施主世大士なり多くの人に代り疫病を受故に病苦

亀戸邑
道祖神祭
毎歳正月十四日
よりこれを奥行と
此地の童子多く
あつまりて菱垣
造りよしたる
小き船に彩の
幣帛を建松竹扶
ちも紐飾し其中
央に宝舟とのゝる文字
を深くゝる幟を建
たるを肩撥に音に
唄ひ連て此辺を
持歩行り其夜
童子集會して祝ひ
戯るゝを
恒例とす

一身に逼まり上人願い我法一千座を修して予が故世の加彼
力となるべしと夢覚て後益敬重を加へ年々を祭り奉る
仏殿より行うて蓮臺より法る感涙肝に命じ支うり昼夜不
退に一千座の観音供を修しかれば四中頓に疫疾の患ひを
逃るることを故に世俗身代観世音と唱へるとかや

卧龍梅　同所清香庵にあり俗間梅屋敷と称す其花一品
にして重瓣繁白にして薫香至て深く形状宛も龍の蟠卧
如し園中四方数十丈に間に蔓て枝高くして枝毎に羊い
地中に入地中を出て枝莖を生じ何れを幹とも弁きたがた
く屈曲して自其勢を彰す仍卧龍の号あり
梅譜に卧梅梅乾杯いとよめるとか
梅譜曰　会都城二十里有卧梅偃蹇十餘丈相傳唐
物也　謂之梅竜好事者載酒遊之　云云

神明宮　同所にあり宮居い一堆の塚上にあり相傳の上古此地い
一の小鴻にして其繞りい海面なりしと其頃渡海の船風浪の
難に逢て此地に漂着し西皇太神宮の加護にて命を全うせし
報賽のため此地に山祇神を勧請なし奉り宮居を営しと
いふ　往古此地船舶多く繋る所なり入と唱へしを今も山地なれを失ひ
の傍にあり神木とす　昔此辺ひとしき海なりし頃漁者の網を
穿て土中に埋網に具とる不の確と名つくるとかや今も此地を
より古人云なりしとり山捜の一名を大平捜と称す　依海辺なりしとする
明王山東覚寺　同所南の方にあり真言宗にして寺鴻の蓮
華寺に属す本尊に弥陀観音勢至の三尊なり　当寺創禄
四年辛卯草創なる所の寺院にして開山を玄覚法印と号す
不動堂　当寺に安置す良矣僧都の影像にして相列大山寺の本尊と同体
縁起曰　当寺往古草庵なりし頃開山玄覚法印ここに住せらる祝ぐ寺禄四年
辛卯或時貢女の優婆塞来りて投宿を乞む法印許諾し其夜日床に安卧
しぬ翌朝法印疾起て仏間に入むとするに傍に一人の壮夫の壮然として行
法印怪み其所を問とするも壮夫い聲唖の如くして答なる不るし其時投

梅屋敷

白雲の
龍を
ほ
む
や
梅の
花

嵐雪

如月の花盛
まゝ容色
強の雪紙
動き餘香の
芳こゝにて四方
馥まゝ花の
後実をもとめ
を採収て日に
乾し陰漬
として常にこれ
を賞味ひ
強く甘美
なるれいこゝに
捨費する人
なれらを
惜む
おれ土産
とも

家の優婆塞これを伊豆山にかくしと云て我笈の中より安する所の不動尊四尺
不うんと云て即笈の前よりひきまいらせ衛行念ゴに不例に彼仕丈身躰の自由なる
ことをおぼえこゝろ和らぎて語を發せるゆへを問ひ給へ此盜賊なりと申す
其罪を謝して永く良ぜよひるゝ依法印これを奇とし其罪を問優婆塞云くゝ良弁僧都相列大山を尾基
より安村より伯耆ゝ其時伯耆を出ゝ通り伯耆を通り伯耆ゝ山頂
ゝ相列大山寺の奥基ゝ其後伯耆道後の岩を削して此すくに我造
に附属せしたゝひ告ゝ云ゝ人界の大患い盜難鈍難のゝ云ゝ此霊像を護持
せい永く汝ゝ孫ゝ見守結縁の輩も又其難を逃れしめんと云ゝ
紀家ゝ相伝せゝ今ゝ五代ゝ田畑の間も路中危難と遊れ一の霊多
くゝ此霊像の垂護によるゝ所ゝ感歎しこの霊像を永く
呼ばゝとゝめ一宇を建立し一番ゝ衆生を結縁せんと欲し願ゝ此霊像を乞求む
優婆塞も伯耆ゝ其意ゝ垂しこの霊像を玄学ゝ所ゝ玄学寺ゝ一宇の香堂を
營ひゝ此霊像を安置奉られなり故ゝ世人盜難除不動尊と称しまゝり

香取大神宮　同所二丁許乾の方にあり

此地も昔い大平榎ゝ繁ゝ繁ゝ
ゝて一の雛鳴ゝり亀の窟ゝ
仍ゝ亀ゝ四ゝを亀ゝ鳴と
唱へたりといふ

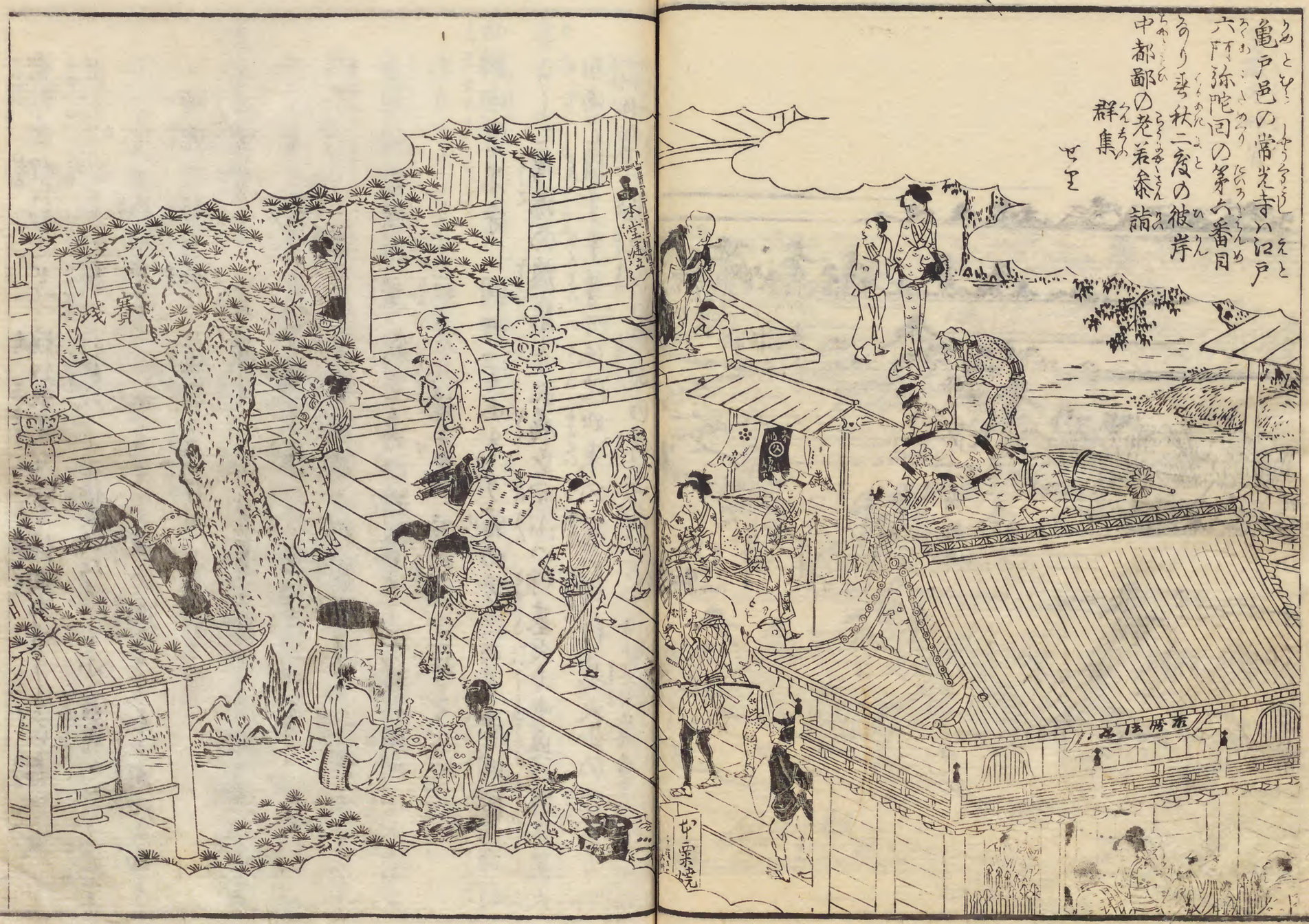
本社　祭神　經津主命　下総一宮の神同躰　相殿　武雷槌命　鹿嶋大神宮
猿田彦命　大杖大明神　三座

當社ハ亀戸村草創ゝりの勧請ゝて此辺第一の古跡なり
或伝ゝ當社ハ大職冠藤原
公の勧請なりといふ

例祭ハ毎年六月十四日十五日ゝ行ふ
行ふ後所ハ吾妻森ゝり二三十歩東の方田の中ゝあり往古

香取之神宮

国立公文書館
National Archives of Japan


ゑと
亀戸邑の常光寺い江戸
六阿弥陀回の第六番目
ゑり巡秋二度の彼岸
中都鄙の老若参詣
群集
せ
賽
本堂建立
中柔堂

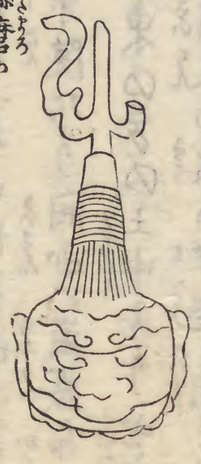
祭礼を行いむとせし頃い此辺なくて海面すりしうい春を流し
其止る地を以猿所と定へしと誓ひたりし小其春町とよ止ると
しとなり故と今も昔の例よりより僅の間すうも十間川よ至り
て神輿を船よ移し猿所へ神幸なしまつると
東林山寶蓮寺　墓藏院と号と真言宗にて寺鴻の蓮華
寺と属と寺そる虚空藏菩薩い行基大士の作なり（江戸三虚空藏の一員なり小石川向山西福寺昌川養願寺茅場）
癸卯俊鑁法印草創とる所の精舎すして始い相列小田原よ
のりしとなり鎌倉北條家の時此地よ移とといの
西帰山常光寺　同所一丁あまり巽の方にあり曹洞派の禪刹
にして摂陽の總泉寺に属と開山い行基大士中興い勝庵最大
和尚と號す本尊所孫陀如来の像い即行基大士の作なり（六阿弥陀第六番目）
来迎松い佛殿の前よ存せり（中古火災の時当寺の本尊火焔と共に焼上りたりしとい）
就中松い同じ地の方にあり（時に竜燈掲るとい）毎歳二月八月の彼岸
中参詣多し
亀命山慈光院　同所十間川を隔て向よあり当寺も洞家の
禪林にして同じく總泉寺に属と永正十年甲戌葛西出雲守
某の令室慈光院殿草創とる所の寺院なり開山い嵐巖和尚
本尊観世音菩薩の像い此地より東の方の土中より出現
ありしとい又境内よ安置せる辨財天の像い智證大師の作
にして葛西出雲守某の尊信あり霊像なりといい
吾嬬權現社　同所十間川の陰よあり此地を吾嬬森又深川森
とも號し別当宝蓮寺なり
本社　祭神　茅橋媛命　一座
日本書紀神代巻曰日本武尊初至駿河其處賊陽従之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而應狩日本武尊信其言入野中而覓獣賊有殺王之情放火焼其野王知被欺則以燧出火之向焼

而得免
一云王所佩釵蓑雲自抽之薙攘王之傍草因是
王曰得免故號其釵曰草薙也蓑雲此云武羅玖毛
津亦進相摸欲往上總望海高言曰是小海耳可立
跳渡乃至于海中暴風忽起王舩漂蕩而不可渡時
有從王之妾曰弟橘媛穗積氏忍山宿禰之女也啓
王曰今風起浪泌王舩欲沒是必海神心也願以妾
之身贖王之命而入海言訖乃披瀾入之暴風即止
舩得著岸故時人號其海曰馳水下畧

相生樟 本社の前右のかたよりすこし連なりと紙をとるのように一根二幹ありつつくるくるとして二股よりわかる社記に往古日本武尊弟橘媛の神靈を
沈を離るること四尺ばかりにして二股よりわかる社記に往古日本武尊弟橘媛の神靈を
落ちあるせ所食しあひし時樟の御箸をとりて末代平天下うんぬん山箸二なたよりはえ
と宣ひ御手を自御廟の東の沈よりさしもひしるよ
後枝葉を生じ今に至りて繁茂せり又
其傍より同じ樟の蘖あり是も一根三幹なり

神寶古鈴一口 長さ八寸ばかりあり 銅色變じ
是よりしきりの常陸の鹿嶋正等寺ちかもめり又息男縣磨ら
なるも藏せり其形大同小異なる故よりを錦しかのこ

鹿嶋正等寺藏



藤原縣磨藏

社記曰人皇十二代景行天皇の御宇四十年皇子日本武尊東夷を
征伐しゆの時相摸國より上總國より往むとて王船に乘たまふ
海中に至りゆの頃暴風忽起り王船漂蕩て渡るべき時て
妾弟橘媛曰今風起浪泌して王船沒むと欲す是必海神の
心なり願わ妾の身を以て王の命を贖ひて海に入むと言訖て淵を
披て入ゆひぬ暴風即止て王船岸に着ゆの後得ゆの
今走水と作る 其後弟橘媛の御櫛岸に漂ひ流れ尊群臣に
命して此所に収め壇を築うしめ端羅を巡して御廟とせしゆの
又其御櫛の寄りし所を櫛を取て上總國君不去の妻明神是なり 當社古ハ
荒陵のみなりしを永久元年北条泰時の幕下鈴木隼人正神尾
采女井出大學等の諸士小祠を創營し神領二百石を附したり
しとなり其後永祿の頃も小田原北条氣の臣妻山丹波守當社
を再興せしとなり

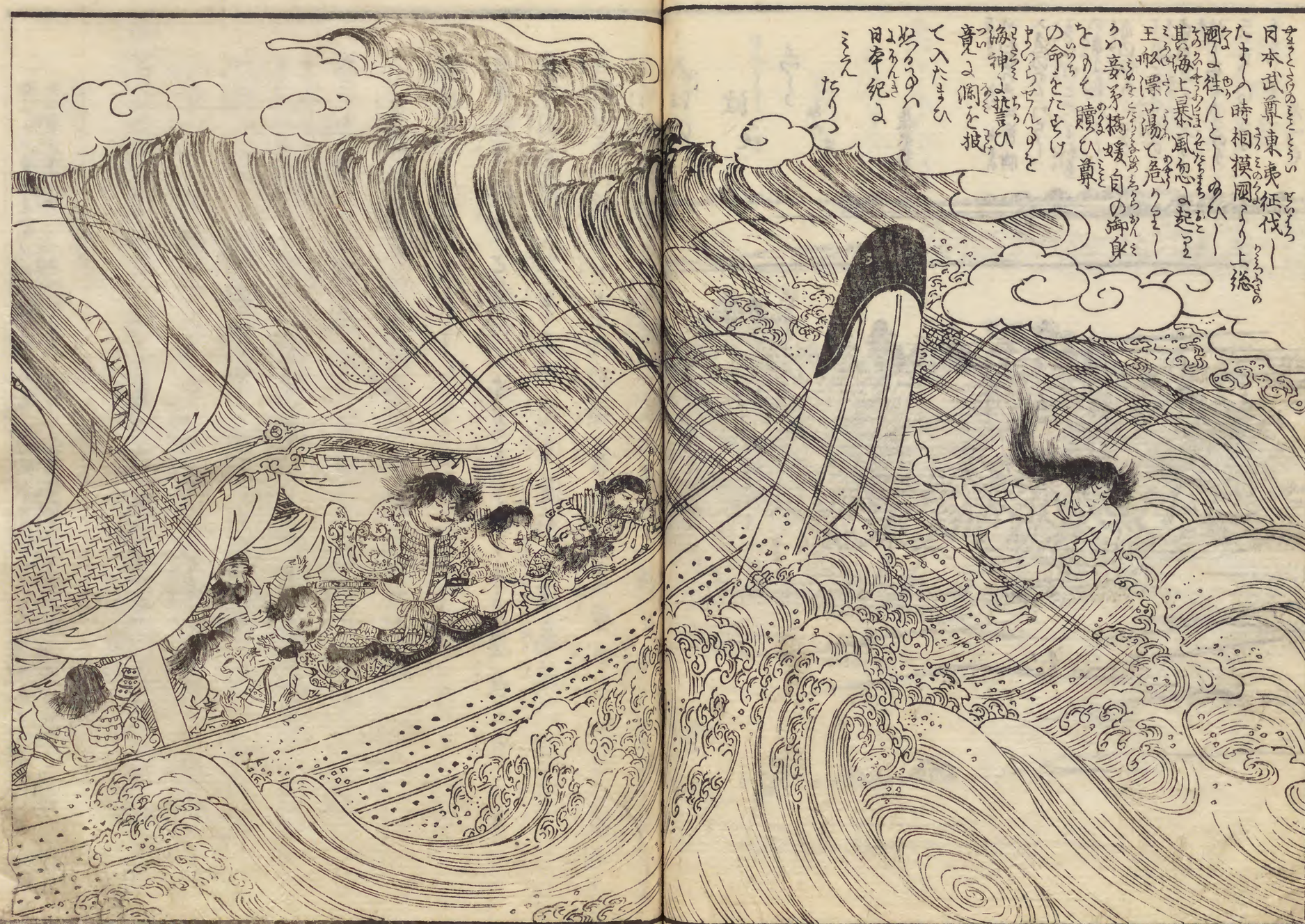
吾嬬森
吾嬬權現
連理樟

鳥ゝ
あ川まの
叢祠
てんらくせい
月い

入江の
波そ
ちゝ
ゑる

兼家恭元
八左

此和歌ハ戸田茂睡
入道のわらハせ
鳥の名とおもふ和歌
の集ハ丸載たり
角の流ありそ
もしこの吾妻の
歌ハ東人とハいふ
住ゝ
この東人ハ
人ゝハいふ
考へを


日本武尊東夷征伐し
たまへ時相摸國より上総
國へ往んとしのぬひし
其海上暴風忽に起りて
王船漂蕩て危うきを
い妾弟橘媛自の御身
をもて贖ひ尊
の命をたすけ
まいらせんことを
海神に祈ひ
竟に海に投て入たまひ
ぬるのち
日本紀に
みえたり

按ずるに小田原北条家の所領役帳にも妙法寺山門法華寺の地名を記し加へ小村井に亀戸村と接して則此社の北の人村をいふ昔の社地の辺も丹波寺の仏地なるべきゆゑ故に當社をも

殖髪聖徳太子堂　同所亀戸天満宮の裏門の通り川端に傍て慈雲山乾眼寺といふる天台宗の寺境に安置せ聖徳太子の御影に太子自親彫造なりと伝て長二尺五寸あり妃との髪を殖させたりとの故に殖髪太子と称せ　其霊像の頂に太子と

当寺藏太子縁起云推古天皇十一年癸亥太子御齢二十二歳同年十月廿八日檜隈宮におひて霊夢を蒙く自親影像を作り班鳩の夢殿に納たまふ　太子傳暦等に此事影像を造るのことを載せたり

其後代々の帝王大寺をなし世々の君子堂に移せ仍て天智帝の七年に百濟寺を営むて安置奉る　慶長七年壬寅に至る迄の間南都大安寺及ひ花洛蓮花王院高雄の神護寺あるい豆州田方の般若王寺相州鎌倉の法華堂武州小菅の最明寺江州滋賀菅原寺洪州金昭寺に奉り竟に後に奉り宝暦十二年壬午十月武州荏原郡の清谷寺より移し長く當寺に安置し奉るといふ

當寺の後園萩を多く栽て中秋の頃開花の時節い壮観なり故に世俗萩寺と字せり

妙見大菩薩　はし川端檜を越て向の角にあり日蓮宗法性寺に安せ本尊の来由詳なる迄世霊験著しく諸人常に絶せ堂前に影向松と号る霊樹あり本尊初て此樹上に降臨ありしといふ故に星降松とも千年松とも呼て元和の頃大樹此地に倒せしに頃更て境の松と号を揚ひしと

傳

天松山最教寺　同所三丁ばかりを隔て西の方にあり日蓮宗にして本尊に釋伽如来の像を安せ寛永年間延山二十七世通心院日境上人開基せ當寺に鎌倉将軍惟康親王蒙古鎮制

龍眼寺

庭中萩を多く栽て中秋の一奇観たり故よ俗呼て萩寺と称せり萬葉集茅ふき作り和名抄鹿鳴草よ作る續日本後紀よ仁明帝嵯峨天皇八月清涼殿よ内宴を設て菅原長を芳宴華の讌といへり白王朝

愛せられし事ゆへの

国立公文書館
National Archives of Japan

柳嶋妙見堂

国立公文書館
National Archives of Japan

押上

最教寺

當寺ハ蒙古退治の旗曼荼羅あり

の為に書しむる所の日蓮上人真蹟の曼荼羅の旗あり

七面堂　境内にあり本山身延同躰の霊像なりと云三澤流祈禱の本所なりて當寺第一冊の仏持仙能院日宗なる所二百日加行して此の傍に祠殿を建立せしと云

日の丸旗曼荼羅　一幅

竪六尺五寸

毎歳七月十六日より初れ一七二日まで虫拂とて七面堂に掲て諸人に示さしむ

月の丸の曼陀羅ハ身延山にあり

兩面之大旗來由記

弘安四年辛巳五月二十一日從大元國蒙古賊船四千余艘人數二十四万余責來七月於九列防戰其時這八大龍王之御旗凡中日蓮聖人爲祈禱之大漫荼羅令書此御旗先立向親王九列給時某爲武之大將至九列則日本國江靈神擁護有神風吹彼賊船其人數等不殘破異國追拂給目出度旗成故我家是預給畢

這兩面之大旗者惟康親王所持之御旗也弘安十二月二十一日

四年五月二十一日從大元國蒙古來船四千艘人數二十四萬人也于時親王此旗四方八大龍王四角四天王中凡相内十眼大曼荼羅日蓮聖人仰而令書是爲持九列向蒙古災給御旗是也

正應元年十月十三日　武列池上村　右衛門太夫宗仲判

蒙古退治蕉曼荼羅来由　人皇九十代後宇多帝御宇弘安

三年庚辰春二月　元至元十七年に當る　鎌倉よりおいて元使杜世忠を殺害　元使日本傳に元の世祖の至元一年日本文永高麗人趙良弼を遣はして使を遣はすべきを奏す同三年八月弘安の郎黒的弘安の郎黒的後に命じ日本に使をつかはす書を持て来る　元王憤て阿剌罕　五倫書卷二十一阿剌罕に作る阿剌罕途中にて病に臥す

平を乞ふ弘安の時蒙海花文虎及忻都供茶丘等の四將に師十萬を率

しめて日本を擊むとす　東國通鑑卷の三十八高麗記云茶丘忻都蒙麗漢四萬の軍を率て合浦を發し花文虎蠻軍十萬を率て江南を發し一俱に一攻鳴に會すと太平記

同四年辛巳夏五月　元至元十八年に當る　蒙古の賊三百萬騎と號起二十四万人と太平記　東國通鑑に戰艦三千五百艘又太平記七萬艘餘艘と號起四千餘艘と云て一なり

元史日本傳六月海に入て七月平壹岐に到り五船に乘て比羅度と云三ヶ所會　天下の人民戰慄

の二鳴及ひ花前肥前に入る　平壹岐守平戸壹岐通を平戸に比羅度を破るとあり異船日本傳

船薫鳥に作る五船山に鷹鳴なり此鳴は花前の國にあり呼

せるなり　元に於て鎌倉に征夷大將軍惟康親王蒙古退治

のため自九州に向ひ給ふ宇都宮貞綱を以て先陣の大將た

らしむ　日蓮上人に命じて日月の旗の田中に大曼荼羅を

書しめ其旗を貞綱に與へ西海に發向せしむ　其時同年閏七月

一日より貞綱海濱に至り彼旗を押立るに颶風俄に起り逆

浪天を侵し賊船漂蕩し或は巖崖に觸て多く壞し蠻軍

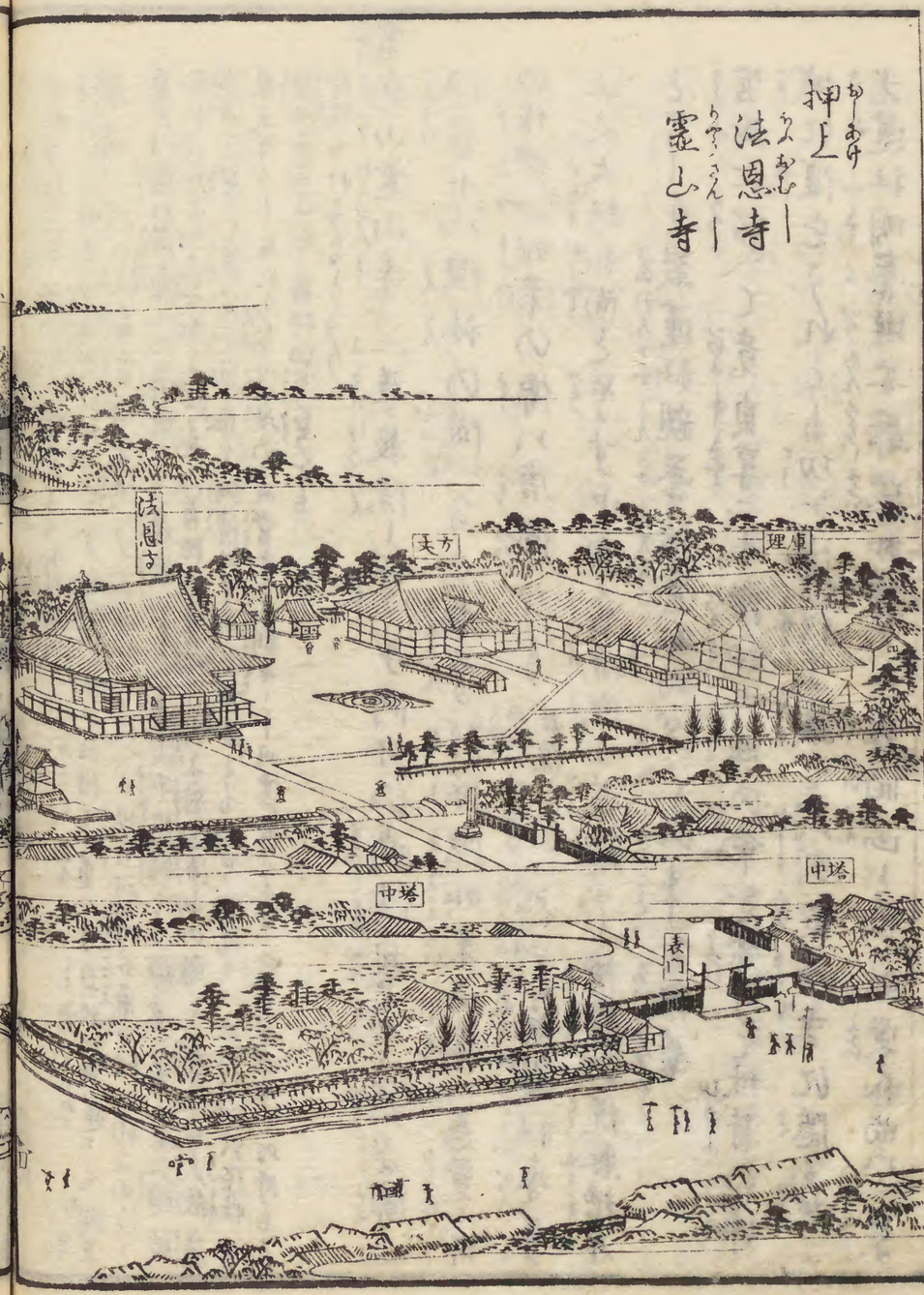
溺死して魚腹に葬られるもの其數を知らず元師大に敗北

を擄にする者凡三萬人悉く是を梟首に其餘は于闐莫青呉

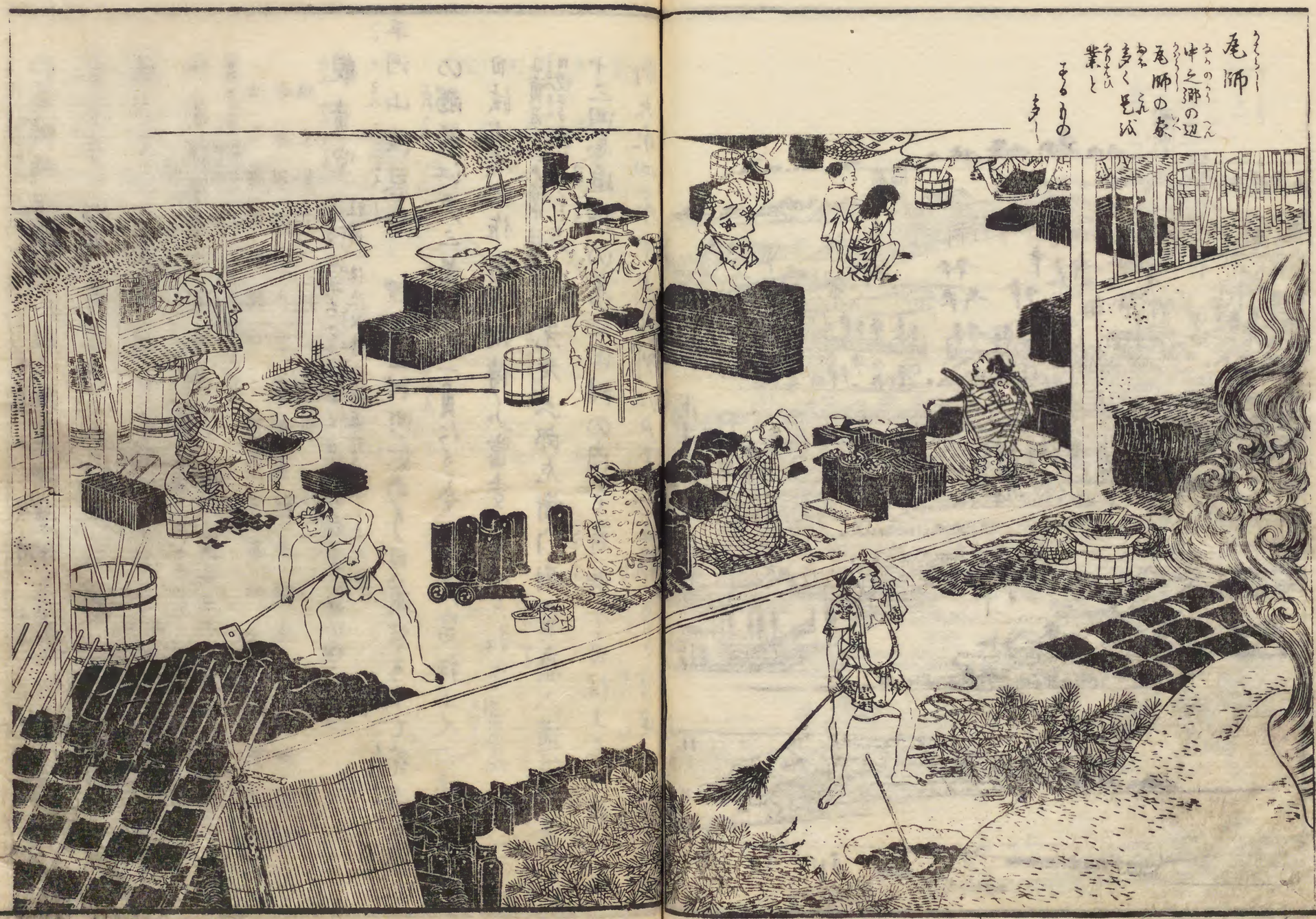
鎌倉將軍
惟康親王
蒙古夷賊
退治の図

国立公文書館
National Archives of Japan

萬五等を赦して國に還らしむ是此事成え主よりたしあんら
ゐるり蒙古の敗卒還るるを得る者僅に此三人のみ 大学術義補
云えの世祖の至え十八年日本を擊兵十餘萬海嶋に死を還るるを得る者僅に三十人とある
を異称日本伝に三十人の十の字誤り行なりと云えり元史に十萬の兵還るるを得る者三人のことと
のりて三人の名を挙たり同く于間曰く莫青同く呉萬五等やはり以上元史日本傳東國
通鑑続資治通鑑綱目大学衍義補五倫書帝王編年集成太平記北条九代記當寺
縁起等の要を摘 依凱陣の後勧賞として永く此猿を貞綱に賜へ貞
綱来由を書して身延山に納む然を當寺開山日境上人身
延より携へ来りて永く當寺の什宝たらしむるとなり
寶聚山大法寺 同三丁より西にあり日蓮宗にして同所法
恩寺に属す當寺は大永六年丙戌創立の梵宇にして開山は
法恩寺第八世大権院日巧上人なり其頃は法恩寺と共に
今の御廓内平川の地にあり後谷中に移され又元禄年
間今の地に轉ずるなり
二十番神堂 本堂の左にあり番神の像は日巧上人の作なり日巧上人は六歳の時疱瘡
を患ひ夢想の泡沫の守れ當寺に出でり
今牧夢想の泡沫の守れ當寺に出でり
廣布石 當寺本堂に秘蔵す今卵塔の中に其撰を置たり真物は日蓮上人親筆
の法華首題を鐫たる石碑なり此霊石亀戸村の地よりと云
亀戸村黄八幡宮の海道たり建長五年日蓮上人伊豆流罪の頃彼
石を乗せ海を渡りて法華の首題を書揚ひ大に廣宣流布の願を誓ひ後廣
布石と号く其後千葉氏より相傳す千葉氏より千葉石とも移せり然るに日巧上人は俗姓千
葉氏なりし故に出家得度の後當寺を創立し此霊石をもつて安置ありて巧所も又
自此石面に二十番神の名号を
刻せられ寄るるなり
常在山霊山寺 二尊教院と号す同所の南法恩寺の北に隣る
浄家十八檀林の随一なり本尊阿弥陀如来の像は慈覚大師
の作釋迦如来の像は唐佛なり 教院は故に二尊
上人大起和尚と号す中古寺院既に荒廃し檀林の統脈絶へ
とせしを最蓮社親誉俊應和尚深く此事を慨屢
官府に訴へて竟貞享二年檀林再興の命を蒙りて往昔の浄
域に復をさんとも功を後住に譲て武州能谷寺に隠る故に
光蓮社明誉遊安廓栄和尚を中興開山とす廓栄和尚は一宗



国立公文書館
National Archives of Japan



国立公文書館
National Archives of Japan

の高徳碩学ゝして往生要集指麾抄を著し大よ世よ行なる
當寺昔い湯鳴妻恋坂よりしら羽暦大仏大の後減草了
稱りまゝ元禄年間今の地ゝうつる（浅草にありし頃の地い今の鶯谷寺中安養寺の所なり）
知恩院尊空法親皇御廟（本堂の西よりあり尊空親皇い徐川小名木川の五本松よ所閑居あり甚故いちゝゝこゝよ
浄土傳燈系圖曰　尊空天蓮社帝譽号照満伏見
守邦親王子入于靈巖室剃染嗣法住洛知恩院元
禄元年十一月七日寂
墓ゝ沛影堂い地中恵満院よりう
観音堂（影堂の前右のこゝろにあり本尊ゝ慈覚大師の作ゝて
桂昌一位尼又法念持佛なりゝとそう）
平河山法恩寺　押鳴出村所にあり日蓮宗ゝて花洛本圓寺
の觸頭江戸ゝ菌寺の一員たり本堂ゝい宗祖上人の像を安ゝて
日法上人の作なり相傳ゝ當寺い太田大和守資高（道灌の孫なり法名靈雲記）
（資高い江戸城中法恩寺日悦ゝる靈なりゝとそう）
先考ゝ六郎左衛門尉資康入道法恩齊（日恩と号）
十三回忌追悼の為ゝ三田村の内を寄附ゝ日住上人を開祖ゝて
則大永四年甲申武州江戸下平河よ精舎を營建ゝ一家の靈

牌を居ると云云

三十番神堂　本堂の前左の方にあり関東古戰場といふるものゝよし云傳ふ三十番神の堂に資高北条家を背き里見義弘より力をあらそ亦永く豊嶋郡の地を知行せんとそはなはだの事もうゝ番神堂の前にて神ゐを呑ける恵ひ定ぬるうゝ再ゝ戦ふと誓約ありしゝ記せり甚だ古今の府城内平川の地よりゝなり

當寺往古は今の御城内平河よりあり本住院と号せしとなり北条家の所役帳に本住坊寺院と三田内蔵院分の地を法恩寺と改しい後世のものとあり刹本住院の名を云ふゝしゝえたり遥に天正の後柳原の辺に移され其後谷中清水坂の辺轉ゝれ元禄の初今の地へひきうれたりといふ

是乃ち平河より清水坂へうつりたりゝ住すて境内に平河清水と称する稲荷の小祠あり

葉平天神社　中の郷南藏院といふる天台宗の寺境にあり傳ひか在原葉平朝臣の霊を鎮ると云云　江戸名所紀に葉平すでに都にのがれ舟に乗て東に下る所の舟この浦にて覆り溺死せり乃里民塚に葬こあたりゝ故に塚のうゝ舟の形なり甚在所を今も葉平村と云又江戸庫にといふる冊にも成平に作り相模と武蔵の類ひ多ゝとも云れも地と葉衡に作り武蔵の水府に葬ゝ此祠昔は今小梅の水府に葬ゝ此祠昔は今小梅の水府に葬ゝ此祠昔は今小梅

秋葉社八毎年
十一月十六日祭礼
ありて賑へり

なくのやくし
多田藥師堂

造營ありて沙羅連山石峰寺と號し此本尊を安置し其
後文永の頃兵火に罹て諸堂悉く田禄と依て一山の大
衆ら れを悲み此本尊を石函に収めゝ山中に埋め奉り然
るより後星霜を移て慶長元年郷民等沙羅山中におひて
此石函を穿出せり蓋し沙羅連山石峰寺藥師の銘あり郷
民等奇異の思ひをなし一堂を一宇を營て是を安置し同八年
其庵主宗玄と云者に本尊の告めのありて京所五条の因幡
堂より暫く安置し又五條の橋詰東の方若宮八幡宮の辺
に堂舍を建て石峰寺と号し寶永の頃彼寺の黄檗の千
呆和尚深草に移し其時故あり本尊藥師佛を當寺に
安置せり

照法山本久寺　北本所表町にあり日蓮宗にて平賀本土寺
に属し天正三年乙亥の創立にて開山清眼院日有上人と

中郷

最勝寺

神明宮

志子堂

号と當寺に安置する所の宗祖大士の像い日朗所御首を彫刻
し日法所令體を造り添られしとの體中三すに六すの首
題の札を收めたり日朗かゝひ日法等の真跡なりといつり
此御影始谷中感應寺に安置と元禄四年彼寺改宗の時
檀家よ八牧弥宗と云る有信の人ありしい此影像あらひに
之光天子大黒天等を其家ようつして宗教ありしを後當
寺に安置しるるとなり境内安亜の七面大明神い花洛村雲の
尼御所隨就寺殿仕女數馬女感得の霊像よして故ありて當寺
に安亜しるるとなり

正覚山妙源寺　同所北本所番場町にあり日蓮宗よして下
野佐野妙顕寺よ属と建武年間の草創よして中老僧天目
上人開山たりとい総門の額正覚山の三大字い平林惇信の
筆跡よして洛日居と記してあり

牛寶山最勝寺　明王院と号と同所表町にあり天台宗よして
東叡山よ属と本尊不動明王の像い良辨僧都の作より當
寺い牛御前の別當寺よして貞観二年庚辰慈覚大所草創
良本阿闍梨開山たり　寛永年間　大樹　此辺所遊猟
の頃屢當寺へ　入御あらせられしより其頃い假の所殿拵
営構なし亜れたりとなり

牛嶋神明宮　同所よ並よ相傳よ貞観年間の法座なりと別
當を神宮寺と称して最勝寺兼帯と

の像は十六歳にて造りたるものの時自親造りたるものとなり當寺は淳和
天皇の嘉祥年間慈覚大師東國遊化の頃の創建にして帝百
畝の水田を寄附したまふ天文の頃此地祝融氏の災に
あひ太子の靈像は自火焔を逃れ出でて恙なかりしよし
江戸名所誌よりうつす

圖書寮文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan